

# 長岡京跡・淀城跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告  
二〇一〇―一七

長岡京跡・淀城跡

2011年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所







# 長岡京跡・淀城跡

2011年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、淀駅周辺整備事業に伴う長岡京跡・淀城跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

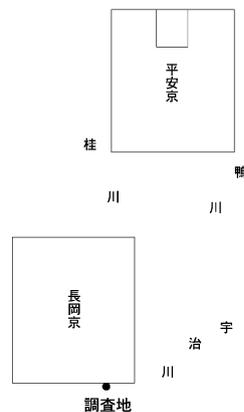
平成 23 年 5 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京跡・淀城跡  
長岡京左京第 542 次調査
- 2 調査所在地 京都市伏見区池上町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2011 年 2 月 22 日～2011 年 3 月 31 日
- 5 調査面積 115 m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 尾藤徳行
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「神足」「納所」「円明寺」「淀」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 尾藤徳行
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

# 目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の経緯	1
(2) 位置と環境	2
(3) 既往の調査と調査目的	4
2. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 検出遺構	7
3. 遺 物	20
(1) 遺物の概要	20
(2) 土器・陶磁器類	20
(3) その他の遺物	24
4. ま と め	26

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	第1面全景（北から）
		2	第3面全景（北から）
図版2	遺構	1	第4面全景（北から）
		2	断割り東壁断面（北西から）
図版3	遺構	1	断割り西壁断面（北東から）
		2	西壁断面（東から）
図版4	遺構	1	石垣2（南西から）
		2	石垣16（北から）
図版5	遺構	1	石垣1・2、土坑8～10（南から）
		2	土坑8・9（北から）
		3	石垣1、土坑10（北東から）
図版6	遺物		土器類
図版7	遺物		その他の遺物

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：400）	2
図3	調査前全景（北から）	2
図4	作業風景（北から）	2
図5	淀城下町復元図と周辺調査位置図（1：5,000）	3
図6	西壁断面図（1：50）	8
図7	断割り東壁断面図（1：50）	9
図8	東壁断面図（1：50）	10
図9	第4面遺構平面図（1：100）	11
図10	東西断面・断割り西壁断面図（1：50）	12
図11	柱穴12実測図（1：50）	13
図12	第3面遺構平面図（1：100）	14
図13	第2面遺構平面図（1：100）	15
図14	石垣2実測図（1：50）	16
図15	石垣16実測図（1：50）	17
図16	土坑8～10実測図（1：50）	17
図17	第1面遺構平面図（1：100）	19
図18	土器実測図（1：4）	21
図19	瓦拓影・実測図（1：4）	23
図20	銭貨拓影（1：1）	24
図21	金属製品実測図（1：1）	25
図22	壁土実測図（1：4）	25
図23	淀城期周辺調査平面図（1：500）	26
図24	江戸時代初頭周辺調査平面図（1：500）	27
図25	「洛外図」内の京口門と調査位置（右方向が北）	28

## 表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	5
表2	遺構概要表	7
表3	遺物概要表	20
表4	銭貨一覧表	24

# 長岡京跡・淀城跡

## 1. 調査経過

### (1) 調査の経緯

この調査は、京阪本線高架事業の一環として計画された、淀駅周辺整備事業（駅前広場）に伴う埋蔵文化財発掘調査である。発掘調査は1999年度から継続して実施しており、今回の調査区は2009年度調査（7次調査）のC2区の北に位置し、一連の調査の中では8次調査となる。調査地は、長岡京の新条坊復元案では京外となるが、旧条坊復元案では左京九条三坊十三町にあたり、また淀城跡の東曲輪北側の京口門付近に位置する。そこで、京都市建設局事業推進室の委託を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導の下、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を実施することとなった。

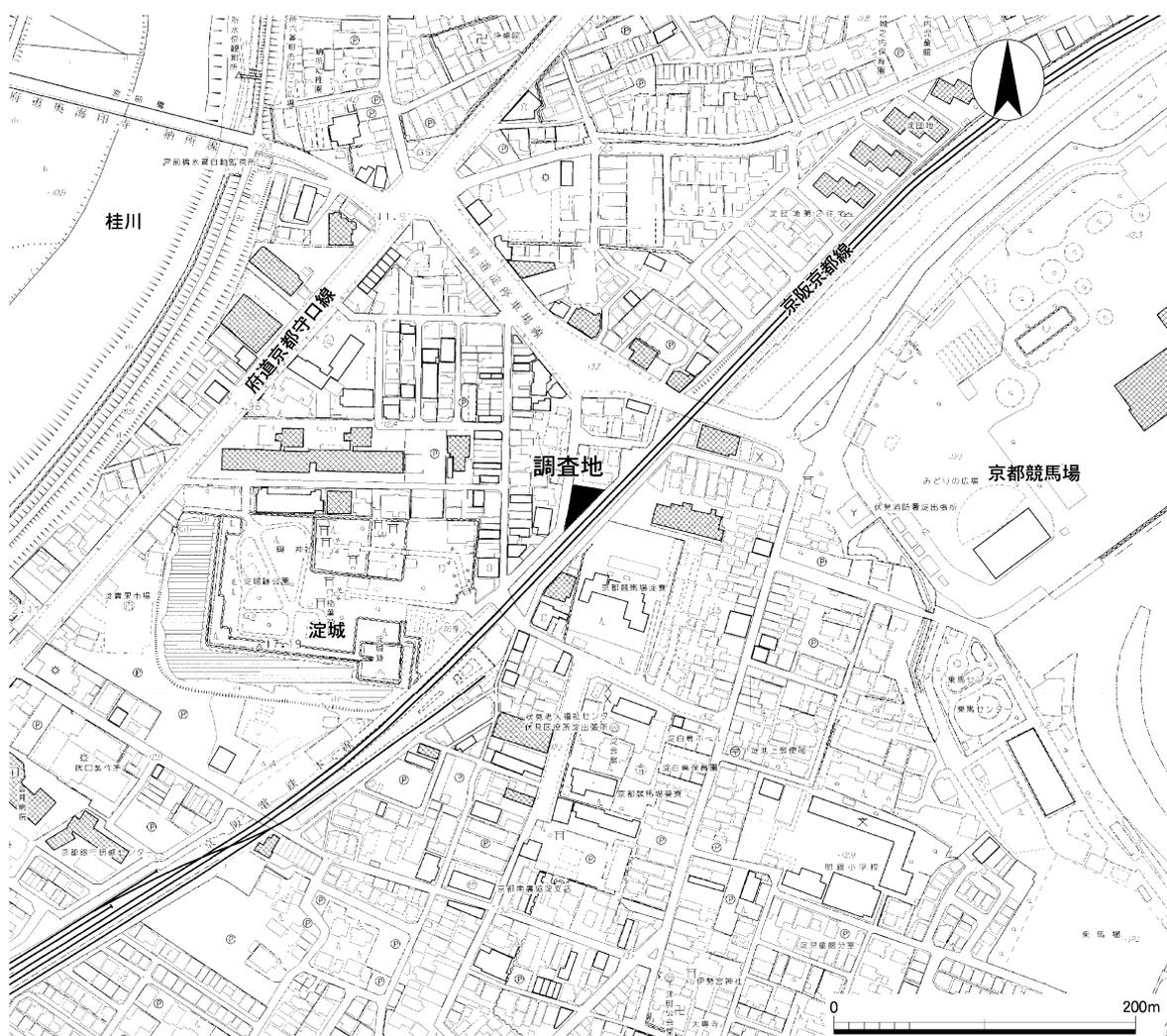


図1 調査位置図（1：5,000）

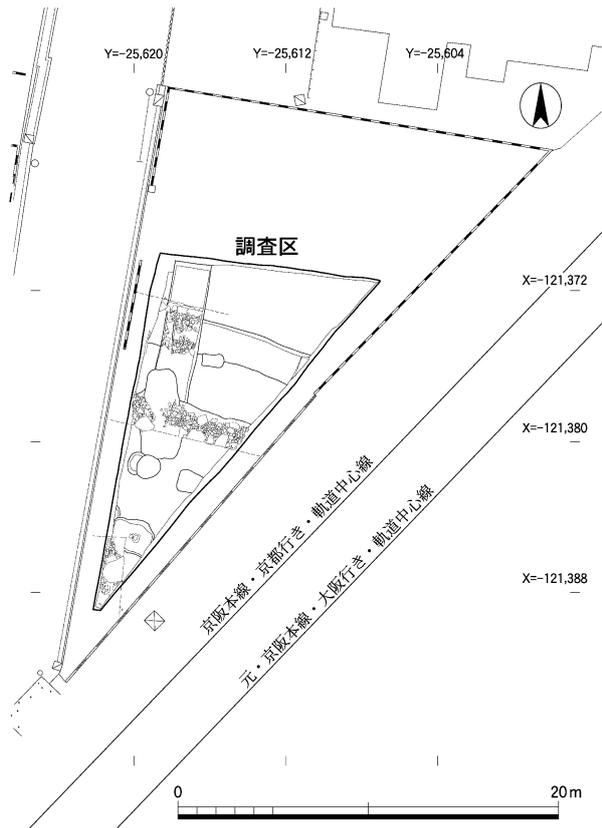


図2 調査区配置図 (1:400)

調査地は、京阪線淀駅前の踏切から線路沿いに北東約100mの地点である。調査地南側に、南北約20m×東西約11.6mの三角形の調査区を設定した。敷地北側に予定した残土置き場が狭いため、まず南側の淀城跡の東曲輪部分の調査を行い、北側の堀部分は調査終了後に、重機で断ち割って、堀の堆積状況や石垣の有無を確認することとなった。調査面積は約115㎡である。

調査は重機による表土掘削を行った後に、人力によって遺構の検出を行った。遺構面は淀城廃城後の第1面、淀城期に相当する第2・3面、淀城築城以前の下層遺構面である第4面が確認できた。とくに、第2・3面では淀城京口門の角櫓や門跡・路面などの遺構を良好な状態で検出し、重要な成果を得ることができた。このため文化財保護課の指導により

遺構を現地保存することとなり、下層の第4面の調査は幅約2mの南北トレンチにとどめた。そして、各遺構面において写真撮影と遺構実測の記録作業を行い、調査後には遺構面を土嚢と砂で保護・養生して埋め戻し、すべての作業を終了した。

なお、調査の過程で、検証委員の視察と、文化財保護課の臨検を随時受けている。

## (2) 位置と環境

現在の淀周辺の地理的な特徴は、『土地分類基本調査』<sup>1)</sup>によると、京都盆地の桂川をはさむ自然堤防分布地帯から南部の桂川、宇治川、木津川の集まる低湿な地域および三角洲的性格の氾濫平野で、礫・砂・粘土の層が発達している。また、平野地の海拔高が10m程度で、縄文海進時には



図3 調査前全景 (北から)



図4 作業風景 (北から)



池沼だったと推定されている。淀付近は、木津川が形成した沖積地帯が大部分を占め、その中に旧河道が数本みとめられる。木津川大橋付近から桂川の淀付近までつながる旧河道が最も顕著なもので、河道によって形成された自然堤防が島状に分布し、その上に集落が展開する。

ところで、現在の淀の地形環境は、江戸時代と明治時代以降の河川改修によって形成されたものである。現在の桂川・宇治川・木津川の三川合流地点は、淀の南西に位置しているが、古代・中世においては、淀の地が三川合流点にあたり、交通の要所であった。『日本後紀』には、「延暦23年（804）7月24日に桓武天皇が与等（淀）津へ行幸する」とあり、以後、平安京の外港として登場する。中世の『東寺百合文書』『北野社家日記』などに、「淀魚市で魚介類、塩、米穀、木材などが取引された」とあり、淀津は流通の重要拠点であった。中世からあった淀城（江戸時代の淀城と区別するため「古淀城」とする。）は、淀城跡の北方、納所町（当時の宇治川の対岸）に位置していたようで、豊臣秀吉が天正16年（1588）から修築した。同時に桂川左岸堤を京都への鳥羽街道とし、淀小橋と淀大橋を渡って大坂へと続く淀川左岸堤を大坂街道として整備している。淀は前代から引き続き交通・水運の要所として重要な地位を占めていたが、文禄3年（1594）、古淀城は伏見城築城とともに廃城となり、港の機能も失った。

江戸時代になると、淀は三十石船の運行などで交通の要衝として復活した。徳川幕府は淀を重視し、元和9年（1623）の伏見城の廃城をうけて、古淀城の対岸の淀中島（現在の池上町・下津町）に淀城を新たに築城することとなった。当地は過書船（三十石船）奉行を勤めた河村与三右衛門屋敷などがあった場所で、二代将軍徳川秀忠の命をうけた松平定綱が築城し、譜代大名が歴代藩主を務めた。寛永10年（1633）には10万石の永井尚政が城主となり、手狭な城下町の拡張と水害防止のため、寛永14年（1637）より木津川の付け替え工事を行っている。木津川と淀川の合流点を下流側に移し、元の木津川河川敷を埋め立てて、外堀と外高嶋の武家屋敷などを造成した。ちなみに図5で示した城下町復元図は、寛永の木津川付け替え・淀城拡張工事以降の図である。

以後、寛文9年（1669）に石川憲之、正徳元年（1711）に戸田光熙、享保2年（1717）に松平乗邑が城主となった。そして、享保8年（1723）に稲葉正知が城主となり、幕末までの約130年間、稲葉家が城主を務めた。その間、宝暦6年（1756）の落雷により天守が焼失するが再建されず、幕末の慶応4年（1868）には鳥羽伏見の戦いで城下は焼失し、明治4年（1872）廃藩となった。明治時代前半、淀城の石垣は払い下げられ、工事用石材として大量に崩されたとある。

### （3）既往の調査と調査目的

淀城跡で行われた主な調査には、調査1～7と今回の淀駅高架工事に伴う1～7次にわたる調査があり、調査地点は本丸および二の丸地域と、東曲輪から本丸南側にかけてが中心となっている（図5、表1）。本丸では石積みの地下室を伴う天守や隅櫓の階段などを検出し、東曲輪では大規模な米蔵や城内の路面を、本丸南の内高嶋では武家屋敷に伴う柱穴や土坑などを検出している。東曲輪や南の曲輪・内高嶋部分には、淀藩の蔵や高位な家臣の屋敷が所在し、東曲輪東側の街道沿いは町人の町屋地域、その東側と南側は下級武士の居住地域があったようで、城内の様相が調

査で明らかになりつつある。

『淀の歴史と文化<sup>2)</sup>』や『京の城—洛中洛外の城郭<sup>3)</sup>』の淀城復元図から、調査地付近は東曲輪北端の京口門付近にあたりと考えられ、また、下層には淀城以前の京都から大坂に通じる大坂街道筋の遺構が想定できる。今回の調査では、淀城東曲輪の京口門周辺の実態を明らかにするとともに、既往の調査で確認している淀城築城以前の遺構の解明を目的とした。また、これまでの調査で平安時代にさかのぼる遺物が出土しており、古代の遺構の確認も目的とした。

表1 周辺の調査一覧表

調査No.	調査方法	調査年度	調査概要	文献
調査1		1987年	本丸天守台部分を全面調査。天守台の地下に石積の地下室があったことが明らかとなった。	註4
調査2	試掘調査	2003年	2区では、地表下0.4~1.4mで南曲輪の建物や塀に伴う石垣を検出。一辺40~70cmの石を上下2段、東西方向に4列で南面して検出。3区では、地表下2.8m以下で北面する石垣（内高嶋北側の中堀南肩）を検出。一辺40~80cmの石が2段以上4列以上並ぶ。軸線は西で27度北へ振る。4区では、地表下1.2mで一辺10~40cmの石材を検出。天守台南の内堀に北面する石垣の裏込め部分である。	註5
調査3	試掘調査	1990年	地表下0.2~2.9mで3層の堀埋土を検出。地表下2.2m（標高10m）で内高嶋北側の中堀北肩の石垣を検出。	註6
調査4	試掘調査	1996年	地表下0.4~1.8mで一辺が40~60cmの花崗岩が東西方向に並び南面する石垣と、南北方向に並び西面する石垣がL字接続し、本丸と二ノ丸の境界の役割を果たしていたと推定する3~4段の石垣を検出。	註7
調査5	試掘調査	1976年	地表下2.5~3.0m以下で二ノ丸西側の内堀東側の石垣を検出。一辺60cm以上の石が2段2列以上積んである事を確認。	註8
調査6	発掘調査	2003年	東曲輪の北端に位置する。標高約12mで淀城期の米蔵跡を検出。	註9
調査7	試掘調査	2006年	本丸北東隅で隅櫓に上る石組の階段を検出。	註10
1次調査	試掘調査	1999年	新淀駅の北端に位置し、湿地状堆積を検出。	註11
2次調査	発掘調査	2003年	東曲輪に位置する。調査6に続く大規模な米蔵の西端を検出。	註12
3次調査	発掘調査	2004年	東曲輪に位置する。調査6の米蔵の南西角や4次調査に続く屋敷地の南北境界を示す石列などを検出。	註13
4次調査	発掘調査	2006年	東曲輪に位置する。3次調査で検出した南北境界石列の延長部分や井戸などを検出。	註14
5次調査	発掘調査	2006年	東曲輪に位置する。淀城復元図では三鉄門東側の空閑地にあたる。地表下1.8~3.0m（標高10.4~9.2m）で淀城期以前の約10面の路面層を検出。路面層の上層では、幅約8mの南北道路とその縁石部分を検出し、江戸時代初頭頃の遺物が出土。下層の路面からは、平安時代から中世の遺物が少量出土。	註15
6次調査	発掘調査	2006年	A1~B5区の調査区を設定。A1区では、内高嶋の外堀北肩部分を検出。A2区では、第1面で内高嶋の18世紀後半以降の土坑・柱穴、第2面で17世紀中頃以降の柱列、建物基礎の石垣を検出。B1区では、本丸南の曲輪の中堀北肩部分を2列検出。B2区では、南の曲輪の建物の布基礎部分、基礎の根石、建物基礎の石垣を検出。B3区では、内堀南肩部分の石垣を検出。B4区では、内堀東肩部分の石垣と、17世紀中頃の三鉄門南の整地層・柱列・瓦敷きの雨落ち・集石遺構を検出。B5区では、三鉄門と東曲輪の間の中堀西肩部分の石垣を検出。工事に伴い石垣の石材112個を取り上げ、16石17個の刻印を確認。	註16
7次調査	発掘調査	2010年	A1~C3区の調査区を設定。A1区では、内高嶋の外堀北肩部分を検出。A2区では、内高嶋の武家屋敷に伴う土壇、柱穴、柱列などを検出。B1区では、南曲輪の中堀北肩部分を検出。B2区では、南曲輪の建物の布基礎部分、基礎の根石などを検出。B3区では、内堀南肩部分の石垣を検出。B4区では、内堀東肩部分の石垣と、17世紀中頃の三鉄門南の柱列・瓦敷きの雨落ち・集石遺構を検出。B5区では、三鉄門と東曲輪の間の中堀西肩部分の石垣を検出。C1区では、淀城期の三鉄門に東面する石垣を検出し、復元すると一辺が50cm以上となる鬼瓦が出土。下層からは淀城期以前の路面・整地層を2面確認。C2区では、淀城期の三鉄門に東面する路面状の空閑地を2時期検出。その下層からは、京都・大阪をむすぶ大阪街道の路面・側溝・縁石、街道沿いの町家の柱列などが4面以上続くことを確認。C3区では、淀城期の外堀部分を検出し、南端で陸地部分を確認。	註17

註

- 1) 「京都西南部」『土地分類基本調査 地形・表層地質・土壤』経済企画庁総合開発局国土調査課  
1972年
- 2) 西川幸治『淀の歴史と文化』淀観光協会 1994年
- 3) 『京の城－洛中洛外の城郭－京都市文化財ボックス第20集』京都市文化市民局文化部文化財保護課  
  
2006年
- 4) 星野猷二『淀城跡・天守台調査概報』伏見城研究会 1988年
- 5) 馬瀬智光「長岡京跡・淀城跡 No.17」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
- 6) 久世康博「淀城跡 (TB29)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
- 7) 馬瀬智光「淀城跡 No.21」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年
- 8) 久世康博「淀城跡 (TB29)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年 表23-1 (1976年調査)
- 9) 内田好昭『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-13 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 10) No.117『京都市内遺跡試掘調査概報 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 11) 上村和直「長岡京左京九条四坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 12) 内田好昭・能芝妙子「長岡京跡・淀城跡 (2次・3次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 13) 註12に同じ
- 14) 尾藤德行「長岡京跡・淀城跡 (4次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 15) 尾藤德行「長岡京跡・淀城跡 (5次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-23 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 16) 尾藤德行・丸川義広・能芝 勉「淀城跡 (6次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-23 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 17) 尾藤德行・長戸満男・南出俊彦『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-7 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年

## 2. 遺 構

### (1) 基本層序 (図6～8、図版2-2・3-2)

地表面は標高約 12.0 m の平坦地で、やや南に低くなっていた。基本層序を西壁・東壁断面図と断割り東壁断面図で概説する。西壁断面で観察できるように、調査区北側では地表下約 0.4 m、南側では地表下約 0.6 m までが盛土となっており、旧地形も南へ緩やかに下がっていたことを示している。

盛土下の基本層序は、北端部・中央部・南半部で大きく変わっている。

北端部では、北堀石垣 16 の上部を抜き取った後に、北側から埋めた土が厚く堆積して形成された落ち込み 4・5 (図6-2～6層、図7-1～6層、図8-2～5層) があり、さらに下層では石垣 16 の北側で堀埋土と想定できる暗緑灰色泥土やオリーブ灰色粗砂 (図7-7・8層) の堆積を地表下約 2.8 m (標高 9.2 m) まで確認している。

中央部では、後述する土手 7 の構築土が確認でき、断割り東壁断面では構築土の厚さは約 1 m で、その下層に淀城築城前の遺構面であるオリーブ褐色粘質土 (図7-37層) が南半部まで堆積する。さらに下層には中世に遡る包含層を標高 10.0 m 前後まで確認した。

南半部では、石垣 2 と石垣 1 との間で、数面にわたる路面の堆積を確認した。路面構築土は固く締まった細砂から砂礫の薄い整地層で、淀城廃絶後の路面と淀城期の路面と下層の大坂街道に関連する路面に分かれる。淀城廃絶後の路面層 (図6-17～19層) は標高約 11.45～11.3 m で検出した。淀城期の路面層 (図6-20・21・23・27層、図8-13・19・20層) は標高約 11.3～11.0 m、大坂街道に関連する路面層 (図6-31・33～36層) は標高約 10.9～10.4 m まで確認している。

以下に各遺構面で検出した遺構について概略する。

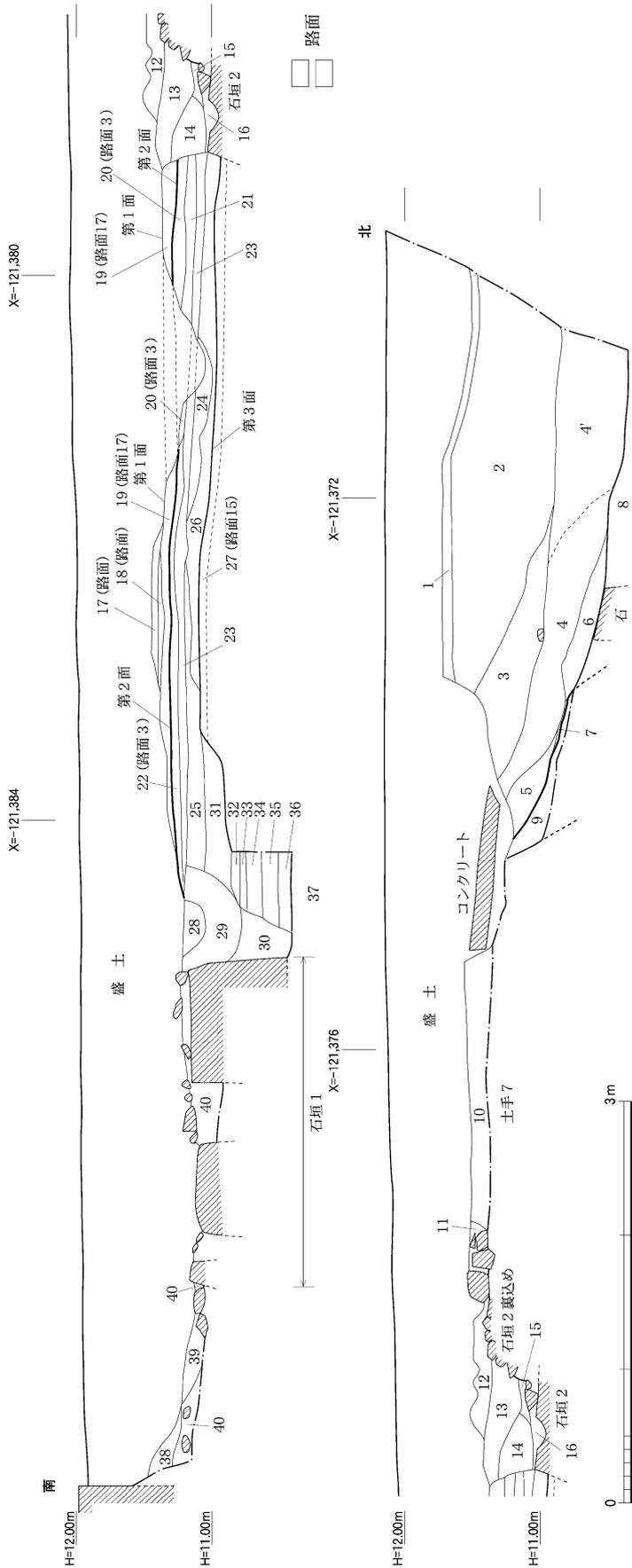
### (2) 検出遺構

#### 1) 第4面の遺構 (図9、図版2-1)

桃山時代末期から江戸時代初頭の遺構面である。7次調査などの調査成果から、調査地周辺は京都と大阪を結ぶ大坂街道が南北に走り、その両側に町屋があったと想定できる。今回の発掘調査でも南北確認トレンチの範囲内ではあるが、大坂街道の路面 18 (西壁断面 31～36層) や敷地境界石列 19、集石列 20 や柱穴 12、礎石、土坑 11 などを検出した。

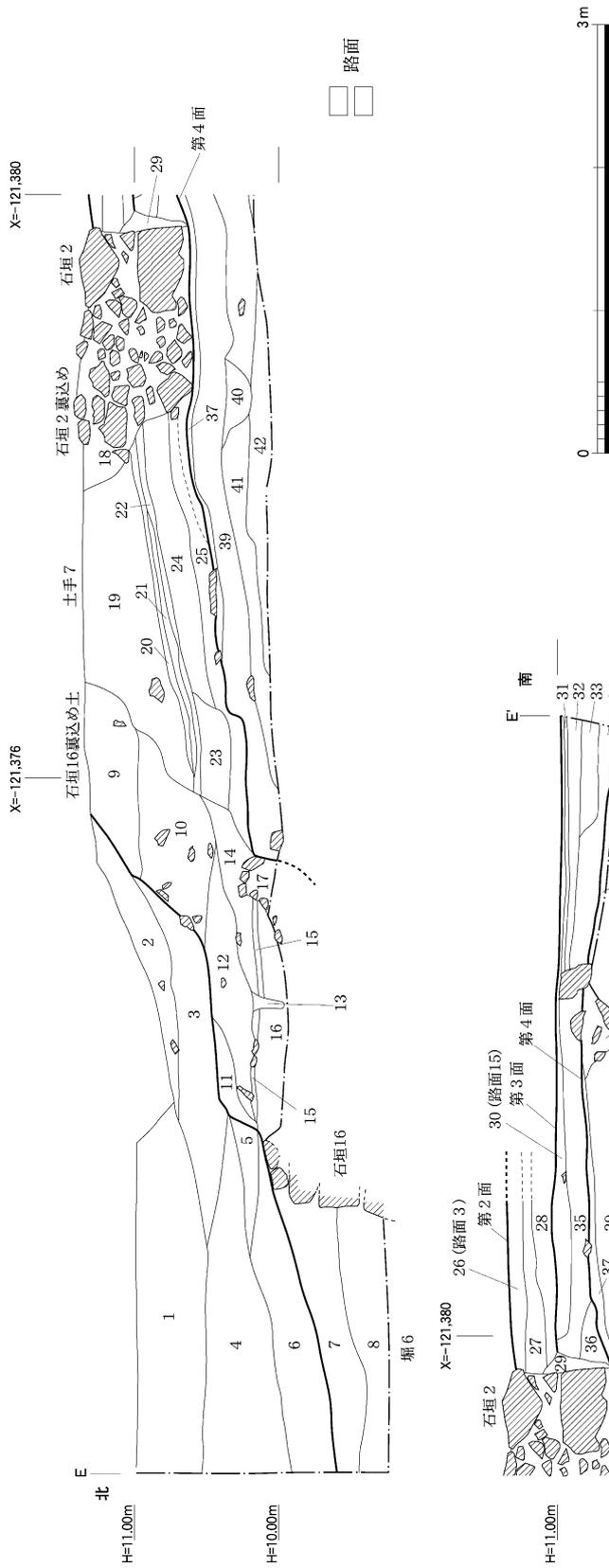
表2 遺構概要表

時 期	遺 構
桃山時代末期～ 江戸時代初頭	柱穴12、土坑11・13～14、路面18、敷地境界石列19、集石列20
江戸時代以降	石垣1・2・16、堀6、土坑8～10、路面3・15、土手7、 路面17、落ち込み4・5



- |  |   |
|--|---|
| <p>1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、粗砂・炭混</p> <p>2 10YR6/4にぶい黄褐色粗砂、礫φ1~10cm少量混 (落ち込み4)</p> <p>3 10YR4/4褐色粗砂、礫φ~5cm混 (落ち込み4)</p> <p>4 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、粘質 (落ち込み5)</p> <p>4' 5Y4/2灰オリーブ色シルト、4層のグライ化 (落ち込み5)</p> <p>5 10YR4/4褐色粗砂、礫φ~2cm混、礫φ10~20cm少量混 (落ち込み5)</p> <p>6 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、礫φ~1cm混、礫φ10cm混 (落ち込み5)</p> <p>7 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、炭・粘土多量混</p> <p>8 2.5Y4/2暗灰黄色シルト、粗砂多量、礫φ10~40cm混、瓦多量混</p> <p>9 10YR4/4褐色シルト、粘質、炭・焼土多量混、2.5Y4/4オリーブ褐色シルトブロック混</p> <p>10 10YR4/4褐色シルト、粘質、炭・焼土多量混、2.5Y4/4オリーブ褐色シルトブロック混 (土手7)</p> <p>11 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、礫多量、微砂多い (石垣裏込め埋土)</p> <p>12 2.5Y4/4オリーブ褐色泥砂、微砂多い</p> <p>13 10YR4/6褐色シルト、微砂多い (石垣抜き取り跡)</p> <p>14 10YR4/4褐色粗砂、礫φ~3cm混、シルト混 (石垣抜き取り跡)</p> <p>15 10YR4/4褐色シルト、粘質 (石垣抜き取り跡)</p> <p>16 10YR4/4褐色粗砂、シルト混 (石垣間の砂)</p> <p>17 10YR3/3暗褐色粗砂、礫φ~3cm少量混 (路面)</p> <p>18 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、シルト混 (路面)</p> <p>19 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂、礫φ1~5cm混 (路面17)</p> <p>20 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、礫φ1~4cm混 (路面3)</p> | <p>21 10YR4/6褐色細砂、粗砂混</p> <p>22 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫、礫φ~2cm混、細砂混 (路面3)</p> <p>23 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、粘質、礫φ3cm少量混、固く締まる (路面)</p> <p>24 10YR3/3暗褐色シルト、粘質、礫φ3にぶい黄褐色シルトブロック混</p> <p>25 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、粘質、粗砂ブロック混</p> <p>26 10YR4/3にぶい黄褐色~10YR4/4褐色細砂、シルトブロック混</p> <p>27 10YR4/4褐色粗砂、礫φ~0.5cm混、シルト混、固く締まる (路面15)</p> <p>28 10YR3/3暗褐色粗砂、礫φ~5cm混</p> <p>29 7.5YR3/3暗褐色泥砂、礫φ~0.5cm混、2.5Y5/2暗灰黄色粗砂シルト混、ブロック混 (土坑10)</p> <p>30 7.5YR3/3暗褐色泥砂、礫φ~10cm混、2.5Y5/2暗灰黄色粗砂シルト混、ブロック混 (土坑10)</p> <p>31 10YR4/4褐色細砂、微砂・シルト混</p> <p>32 2.5Y5/2暗灰黄色シルト、10YR4/4褐色シルトブロック混、上面が固く締まる (路面)</p> <p>33 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂、粗砂混</p> <p>34 10YR4/6褐色細砂、上面が固く締まる (路面)</p> <p>35 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、礫φ~1cm混 (路面)</p> <p>36 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、礫φ~1cm混、固く締まる (路面)</p> <p>37 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、粘質、粗砂・礫φ~1cm多量混 (路面)</p> <p>38 2.5Y5/3黄褐色粗砂</p> <p>39 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、10YR4/4褐色砂泥ブロック混</p> <p>40 10YR4/4褐色粗砂、粘質、粗砂混</p> |
|--|---|

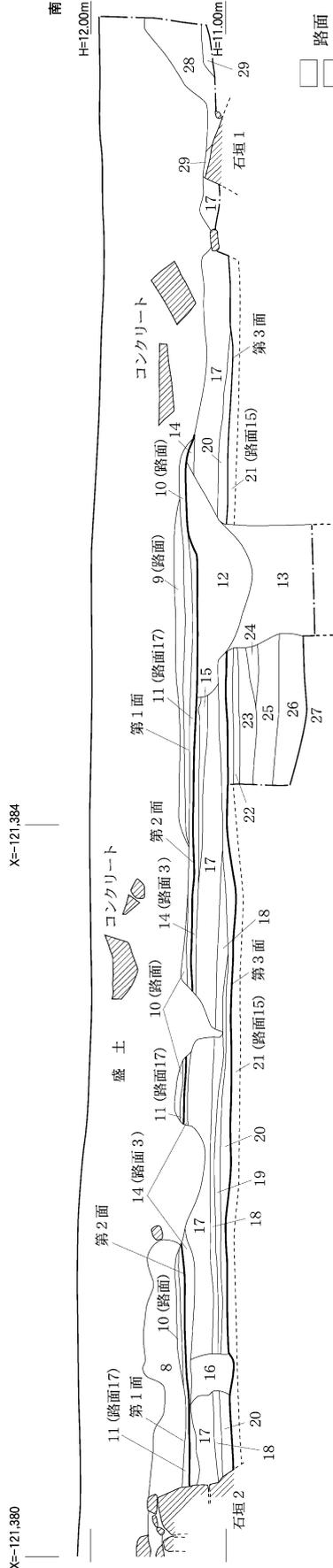
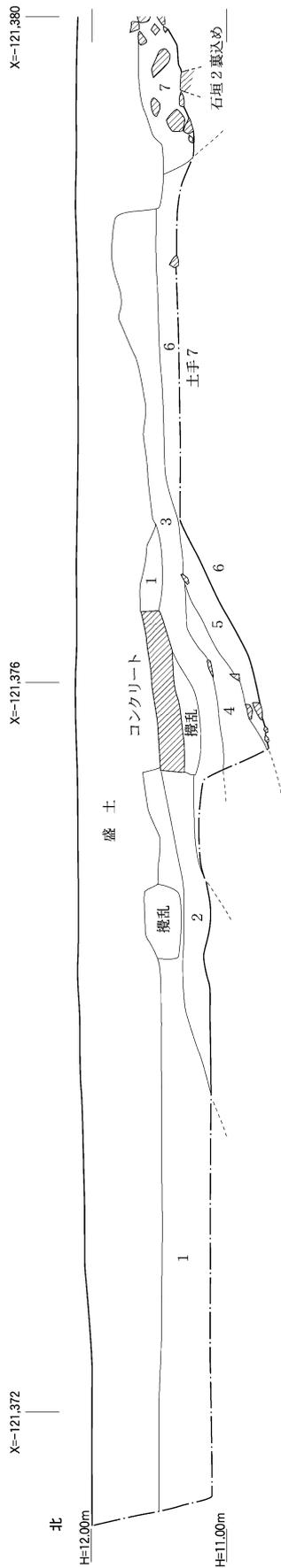
図6 西壁断面図 (1:50)



- 21 10Y2/1黒色泥砂(炭)+5YR5/8明赤褐色砂泥(純土)(純土層)
- 22 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、2.5Y6/4にぶい黄色砂泥混、炭混
- 23 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、粘質、礫φ~0.5cm混
- 24 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、粘質、礫φ0.5~2cm中量混、炭少量混
- 25 10Y2/1黒色泥砂(炭)+5YR5/8明赤褐色砂泥(純土)
- 26 10YR4/4褐色粗砂、礫φ~3cm混、固く締まる(路面3)
- 27 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂、微砂混
- 28 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、粘質、炭・小礫混
- 29 10YR4/4褐色細砂、粗砂・礫φ~3cm混
- 30 10YR4/4褐色細砂、粗砂多量、固く締まる(路面15)
- 31 10YR4/4褐色細砂、炭・5Y4/8赤褐色砂泥の純土多量混(純土層)
- 32 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、砂泥混、10YR4/6褐色粘土ブロック混
- 33 10YR3/3暗褐色シルト、炭・純土混(土坑11)
- 34 7.5YR3/3暗褐色シルト、炭・純土多量混(土坑11)
- 35 10YR3/3暗褐色シルト、粘質、粗砂・礫混、炭混
- 36 10YR4/4褐色シルト、粘質、炭・純土多量混
- 37 2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土、土師片混
- 38 2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土、礫φ0.3~1.5cm混(集石a)
- 39 10YR4/4褐色粘質土、2.5Y4/2暗灰黄色微砂ブロック混
- 40 10YR3/4暗褐色粘質土、10YR5/3にぶい黄褐色粘質土ブロック混
- 41 10YR4/2灰黄褐色砂泥、粘質、10YR5/3にぶい黄褐色粘質土ブロック混
- 42 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、粗砂混

- 1 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥、礫φ1~5cm少量混
- 2 10YR5/2灰黄褐色泥砂、礫φ0.5~1cm多量混、礫φ5~10cm少量混
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫φ0.5~1cm多量混、土師片・炭少量混
- 4 10YR5/2灰黄褐色シルト、粘質、礫φ1~5cm少量混
- 5 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂、粗砂・礫φ1~5cm多量混
- 6 7.5GY4/1暗緑灰色シルト、粘質、木製品多量混、礫φ5~10cm少量混
- 7 7.5GY4/1暗緑灰色泥土、粘質(堀6)
- 8 2.5GY5/1オリーブ灰色粗砂、礫φ~5cm混(堀6)
- 9 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、礫φ0.5~1cm多量混、土師片・純土多量混(石垣16裏込め土)
- 10 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、礫φ0.5~1cm多量混、礫φ10~30cm多量混、礫φ~10cm少量混(石垣16裏込め土)
- 11 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫φ1~3cm混(石垣16裏込め土)
- 12 10YR4/4褐色砂泥、礫φ3~6cm少量混、瓦混(石垣16裏込め土)
- 13 10YR3/4暗褐色粘質土
- 14 10YR4/4褐色粘質土、炭・純土少量混(石垣16裏込め土)
- 15 10YR5/1褐色粘質土(石垣16裏込め土)
- 16 10YR3/4暗褐色粘質土、炭少量混(石垣16裏込め土)
- 17 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥、粘質、礫φ10~30cm多量混(石垣16裏込め土)
- 18 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、微砂多量混(石垣2裏込め土)
- 19 10YR5/3にぶい黄褐色シルト、礫φ0.5~1cm多量混、2.5Y5/4黄褐色砂泥混、土師片・瓦混
- 20 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土+2.5Y4/3オリーブ褐色細砂、2.5Y6/4にぶい黄色砂泥ブロック混

図7 断割り東壁断面図 (1:50)



- 1 10YR6/4にぶい黄褐色粗砂、礫φ1~10cm少量混
- 2 10YR4/4褐色粗砂、礫φ~5cm混、シルト混
- 3 10YR4/2灰褐色細砂、粘質、礫φ1~3cm混
- 4 10YR4/4褐色粗砂、礫φ~2cm混、礫φ10~20cm少量混
- 5 10YR4/4褐色シルト、粘質、炭・珪土多量混、2.5Y4/4オリーブ褐色シルトブロック混
- 6 10YR4/4褐色シルト、粘質、炭・珪土多量混
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、微砂多量混 (石垣2裏込め埋土)
- 8 2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂、微砂多量混
- 9 10YR4/4褐色シルト、礫φ1~3cm多量混、固く締まる (路面)
- 10 10YR4/4褐色粗砂、礫φ1~3cm多量混、シルト混、固く締まる (路面)
- 11 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、礫φ1~5cm混、固く締まる (路面17)
- 12 7.5YR3/3暗褐色泥砂、礫φ~0.5cm混、2.5Y5/2暗灰黄色粗砂シルト混ブロック混 (土坑10)
- 13 7.5YR3/3暗褐色泥砂、礫φ~10cm混、2.5Y5/2暗灰黄色粗砂シルト混ブロック混 (土坑10)
- 14 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、礫φ~2cm混、細砂混 (路面3)
- 15 10YR4/4褐色粗砂
- 16 10YR4/4褐色シルト、粗砂多量混、10YR4/3にぶい黄褐色細砂ブロック混
- 17 10YR4/6灰褐色細砂、粗砂混
- 18 2.5Y4/4~4/6オリーブ褐色粗砂、微砂ブロック混
- 19 10YR4/4褐色粗砂、細砂混
- 20 10YR4/3にぶい黄褐色~10YR3/3暗褐色シルト、粘質、礫φ~3cm少量混、固く締まる (路面15)
- 21 10YR4/4褐色粗砂、礫φ~0.5cm混、シルト混、固く締まる (路面15)
- 22 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、砂泥混、10YR4/6褐色粘土ブロック混
- 23 10YR4/4褐色粗砂、粘質、炭・珪土多量混、2.5Y4/2暗褐色シルト粗砂混ブロック混
- 24 10YR4/4褐色シルト、粘質、炭・珪土多量混
- 25 10YR3/3暗褐色シルト、炭・珪土混
- 26 7.5YR3/3暗褐色シルト、炭・珪土多量混
- 27 2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂、礫φ~1cm混
- 28 2.5Y5/3黄褐色粗砂
- 29 10YR4/4褐色粗砂、粘質、粗砂混

図8 東壁断面図 (1:50)

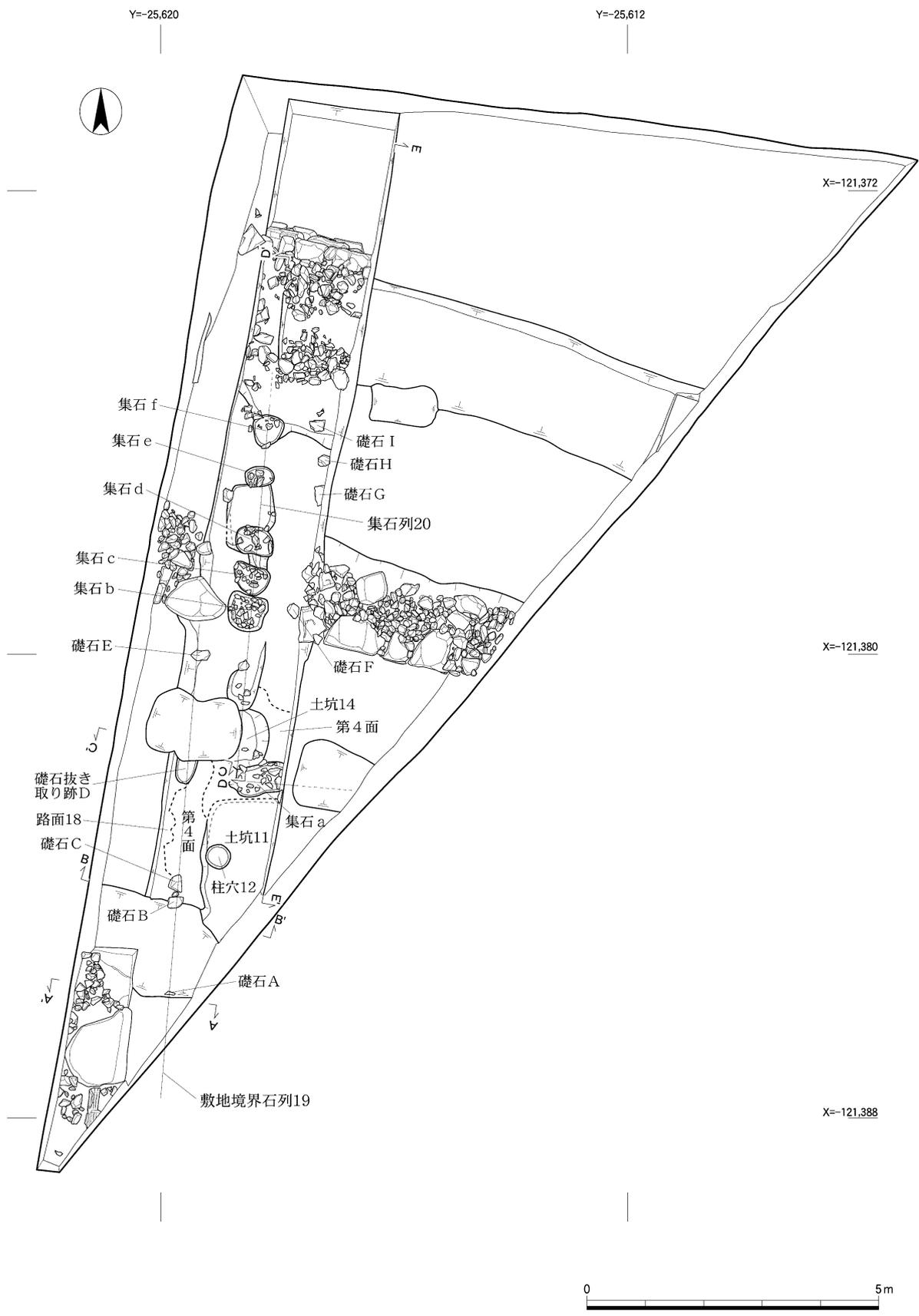


図9 第4面遺構平面図 (1 : 100)

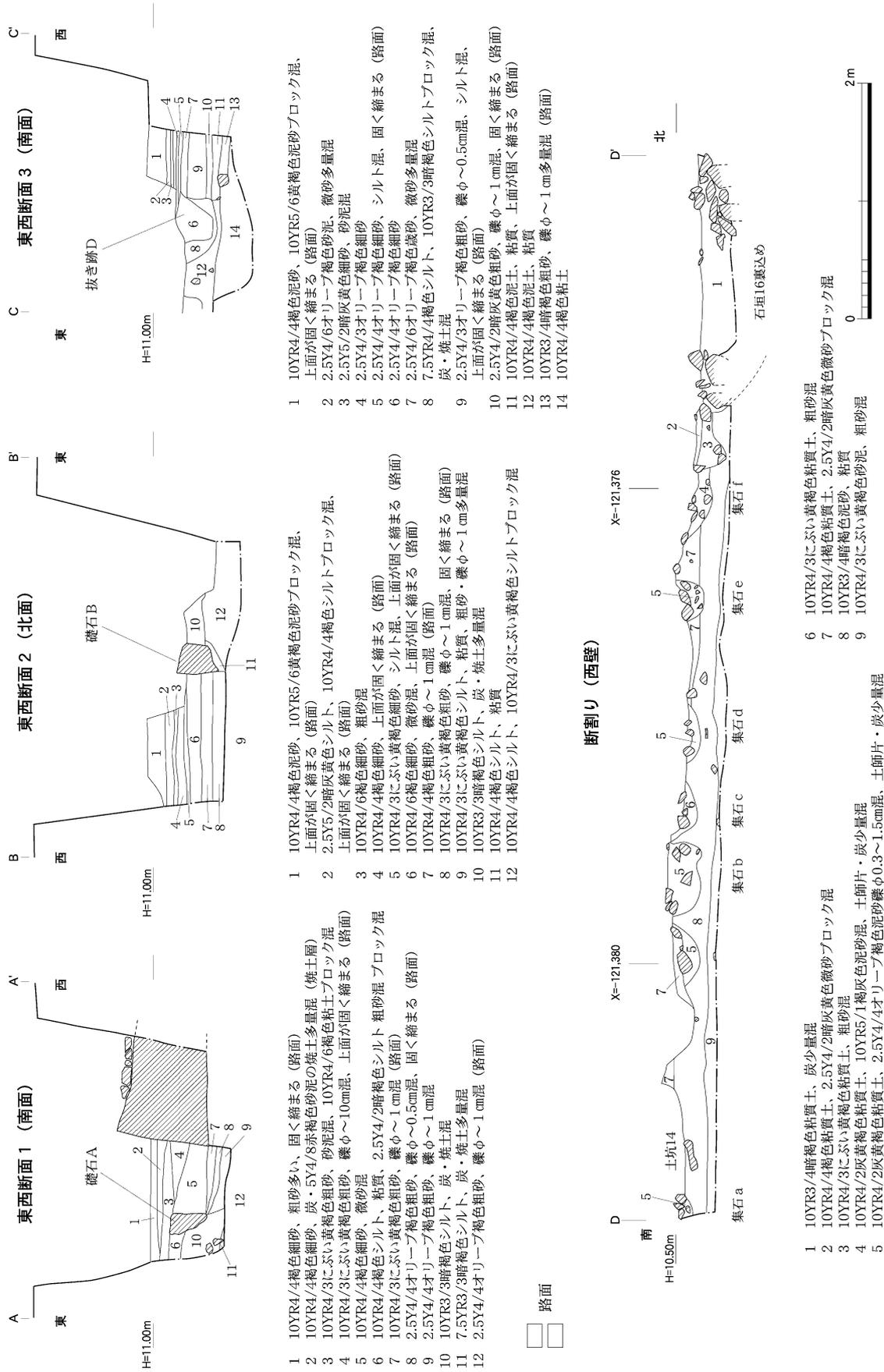


図 10 東西断面・断割り西壁断面図 (1 : 50)

路面 18 調査区南西において、南北約 2.5 m、東西約 0.5 m の範囲で検出した路面遺構である。後述する土坑 8 ～ 10 の断面観察から、南北 5 m 以上、東西 1.2 m 以上続くことを確認した。この路面は、5・7 次調査で検出された南北方向の大坂街道路面である。この下層で 4 層（西壁断面図 33 ～ 36 層）の路面層を標高 10.4 m まで確認した。

敷地境界石列 19 礎石 A ～ C ・ E は標高 10.8 m 前後で検出した。一辺 0.2 ～ 0.3 m で、長辺を立てて据えられている。抜き跡 D は礎石が残っておらず、オリーブ褐色細砂で埋め戻されていた。A ・ C ・ D ・ E 間は、約 2 m 間隔を測る。路面 18 と敷地を区切る敷地境界石列と考える。図 10 の東西断面 1 ～ 3 から、礎石は路面敷と敷地との境界に掘り込まれて設置されていることがわかる。5 ・ 7 次調査では路面と敷地境界の間に側溝が見られたが、今回の調査範囲では側溝は検出されていない。

集石列 20 南北約 6 m、東西 0.8 m に渡って検出した、連続した集石土坑群である。ほぼ南北方向に並び、集石 f から北方と、集石 a から東方に続く。断面断割りから、布基礎状ではなく、独立基礎状であることを確認した。一辺約 0.3 ～ 0.5 m の円形で残存深度は約 0.1 ～ 0.5 m を測る。埋土には直径 0.1 m 大の栗石が多く詰まり、集石 a では砂礫がその隙間を埋めていた。集石 a は残存状態が良く、標高 10.8 ～ 10.5 m で検出されたが、集石 b ～ f は上部が削平され、標高 10.6 ～ 10.4 m で検出した。7 次調査 C 2 区のように、上部に礎石を据えた柱穴とも考えられる。

礎石 F ・ G ・ H ・ I 標高 10.5 ～ 10.2 m で検出した、一辺 0.3 ～ 0.4 m の上面が平らな礎石である。調査範囲が狭く、建物は復元できない。

土坑 11 東西 2.5 m 以上、東西 1.2 m 以上、深さ 0.2 m 以上の土坑で、大量の焼土・焼けた壁土・炭とともに、ほぼ完形の焼けた瓦灯・風炉が出土した。第 4 面で検出したが、第 3 面を造成するときの埋土と考えられる。

柱穴 12（図 11）土坑 11 の底面で検出した直径 0.4 m の柱当たりのある柱穴である。建物の柱穴と思われるが、調査範囲が狭く、建物を復元できなかった。

## 2) 第 2 ・ 3 面の遺構（図 12 ・ 13、図版 1 - 2）

江戸時代淀城期の遺構面で、標高約 11.0 ～ 11.5 m 前後で検出した。下層の江戸時代前期の遺構面を第 3 面、上層の江戸時代後期の遺構面を第 2 面とする。淀城築城時に土手 7 を盛土するが、そのとき第 4 面以下の路面・整地層を掘り下げて、石垣 1 ・ 2 ・ 16 を構築している。また、淀城期の路面上から土坑 8 ～ 10 が穿たれた。「笹井家本 洛外図屏風」（図 25）にあるように、石垣 1 は角櫓基礎の石垣、土坑 8 ～ 10 は門礎石の基礎跡と考えられる。当時の石垣や土手 7 は検出し

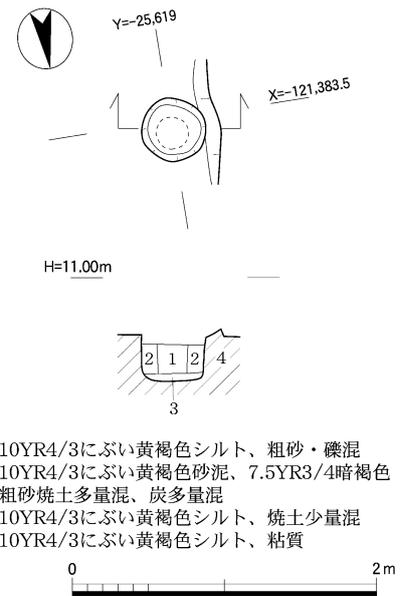


図 11 柱穴 12 実測図（1：50）

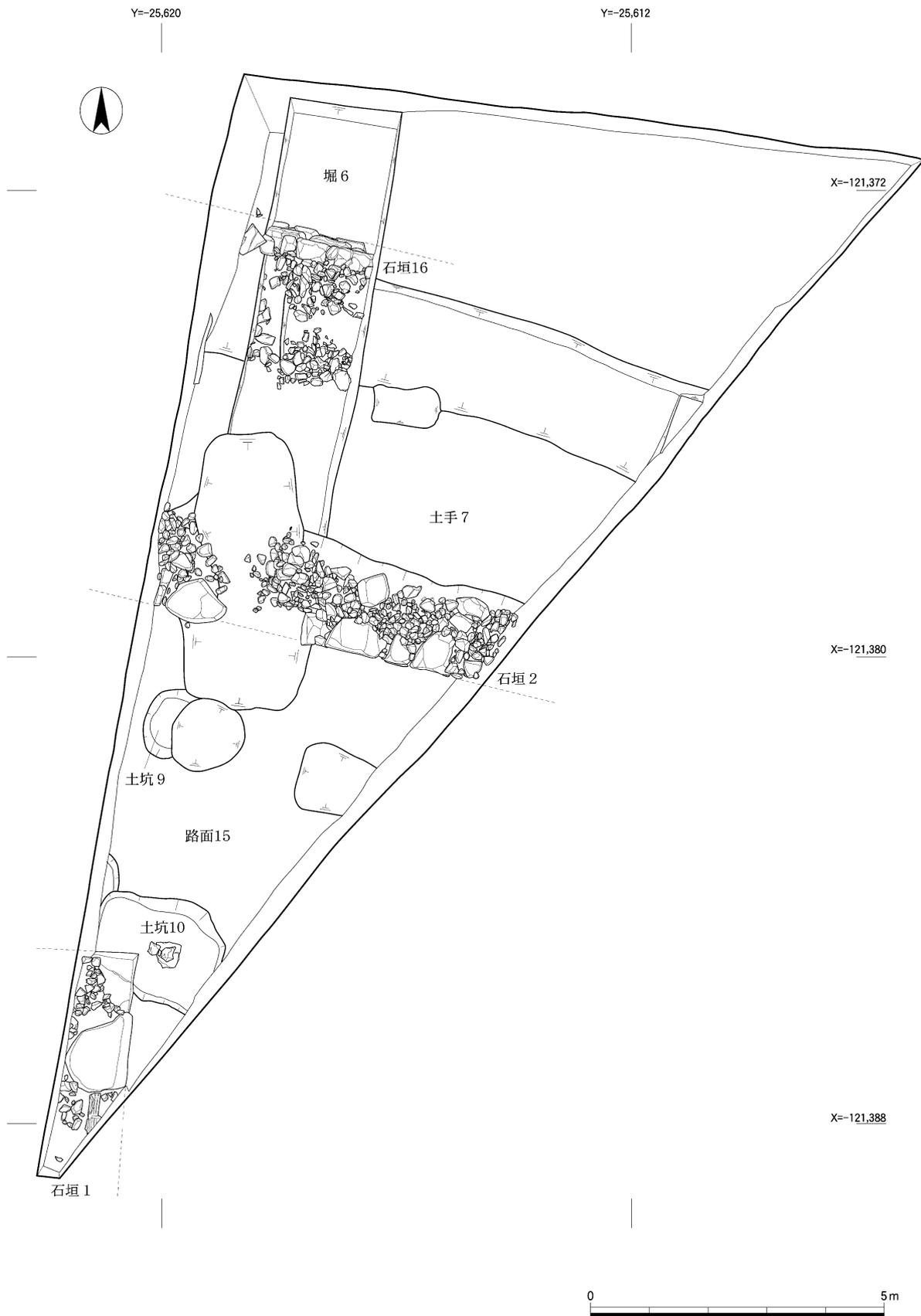


图 12 第 3 面遺構平面図 (1 : 100)

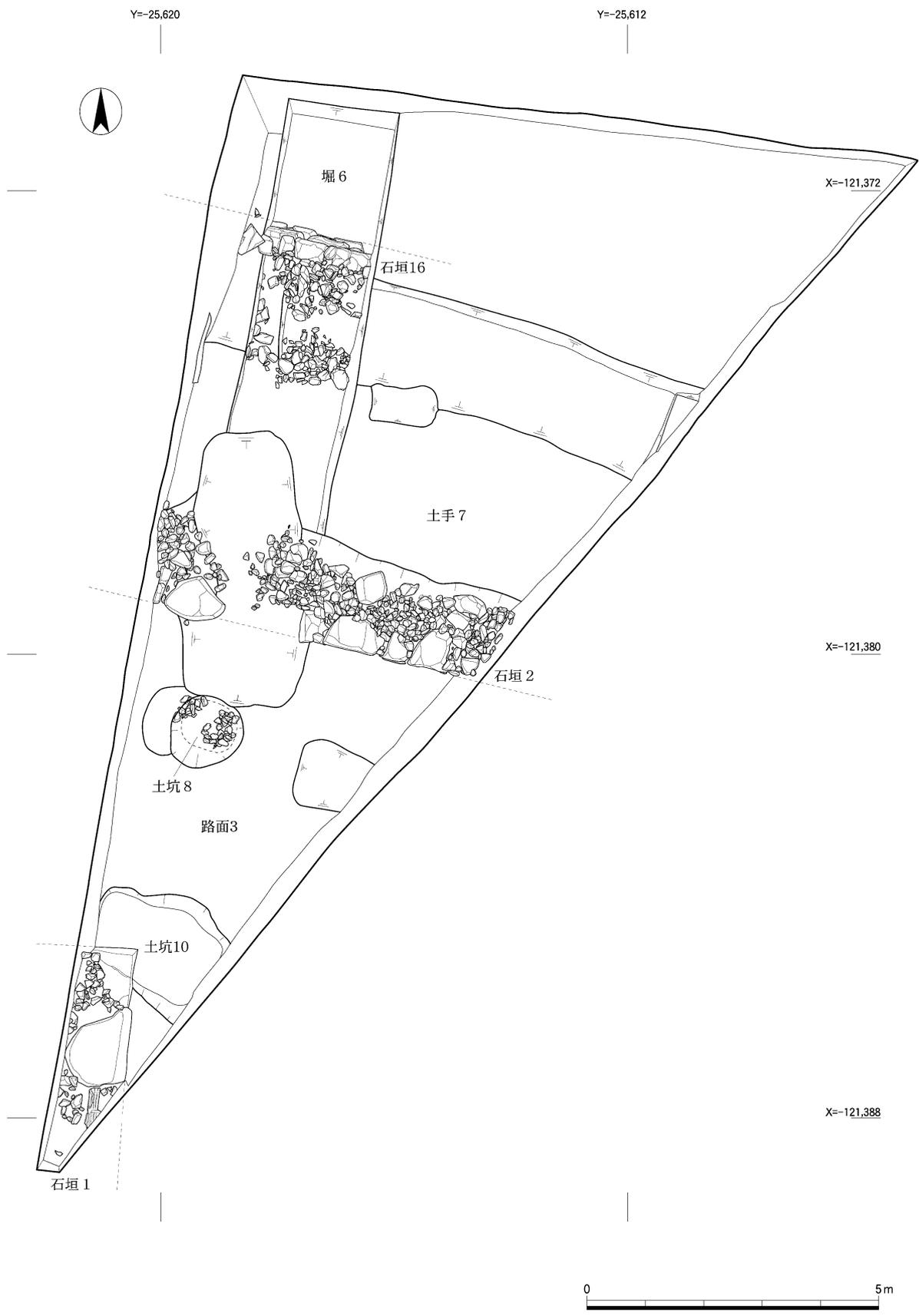


图 13 第 2 面遺構平面図 (1 : 100)

た上面よりも高かったと思われるが、明治時代に壊され、全容は不明である。なお、6・7次調査のB1区では、江戸時代後期に拡張工事で石垣の作り替えが行われていたが、当調査区の石垣1・2・16、土手7、土坑8・10などは、築城時そのままに継承されていた。

路面15 標高約11.0mで検出した路面遺構（西壁断面図27層）で、第4面の上に盛土したあと、褐色粗砂（混礫）を固く締めて整地したものである。江戸時代後期には路面はかさ上げされ、標高約11.3mで路面3（西壁断面図20・22層）を検出した。

石垣1（図版5-1・5-3） 調査区南端で検出した、南北3石の石垣である。検出範囲は東西0.7m、南北3.3mで、西方と南方は調査区外に続く。北側の2石は花崗岩、南端の1石はチャートで割れていた。北端の石は東西0.7m以上、南北1.0m、厚さ0.8mを測る。地上に露出する部分はさらに丁寧に表面を整形している。中央の石は、東西1.0m、南北1.3m、厚さ0.3m以上を測る。石垣1は角櫓の北東角部分の石垣と考えられる。検出した標高は11.3mである。

石垣2（図14、図版4-1・5-1） 調査区中央で検出した南面する東西石垣で、北側の石垣16と南側の石垣2で土手7を構築する。検出範囲は東西5.6m、石垣の奥行きは裏込め部分を含めて南北幅約1.8mを測る。地下室の攪乱を受けていたが、一辺0.4～1.0mの石が、東西8石、上下2段残存している。淀城期には、裏込めは露出していなかったと思われるので、少なくとも、

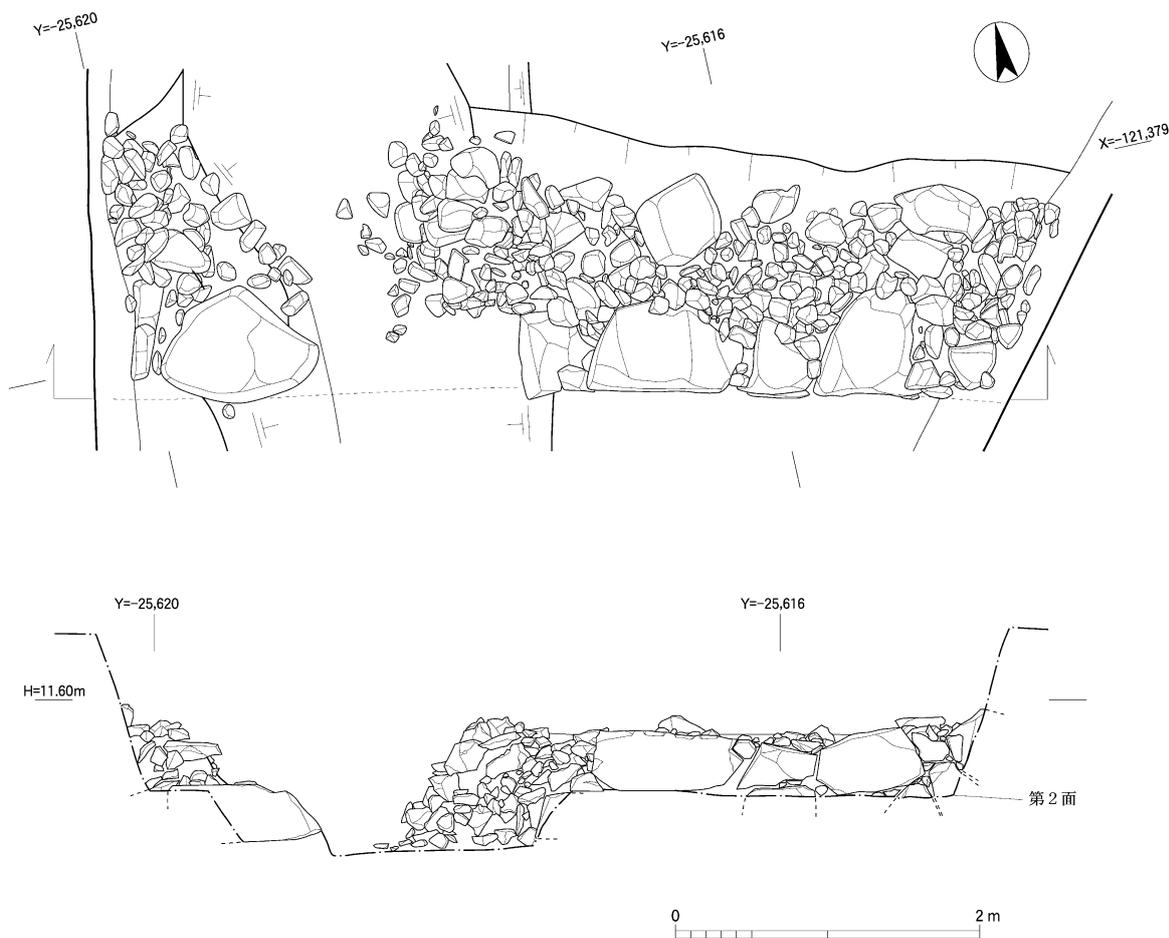


図14 石垣2実測図（1：50）

石垣石はもう1段上までであったと考えられる。標高11.4～11.5 mで検出した。

石垣16（図15、図版4-2）調査区北端で検出した北面する東西石垣である。検出範囲は東西1.9 m、石垣の奥行きは裏込めを含めて南北約1.3 mである。深さ0.9 mまで確認したが、安全を確保するため底部までは検出できなかった。一辺0.3～0.8 mの不揃いの花崗岩などを東西5石、上下に3石積み上げる。外堀6に面する石垣で標高約10.0 mまで残存しているが、明治期に石が払い下げられるまでは、少なくとも土手7の標高11.3 mまでであったものと考えられる。

土手7 調査区中央で検出した、石垣2と石垣16の間に構築された幅約7 mの土手遺構である。

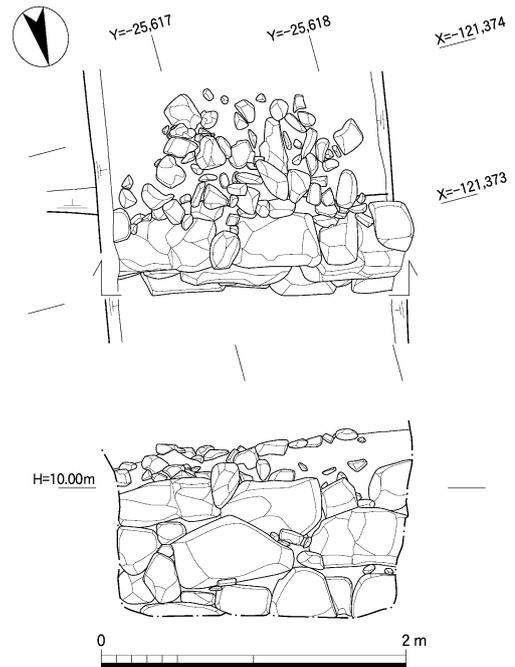
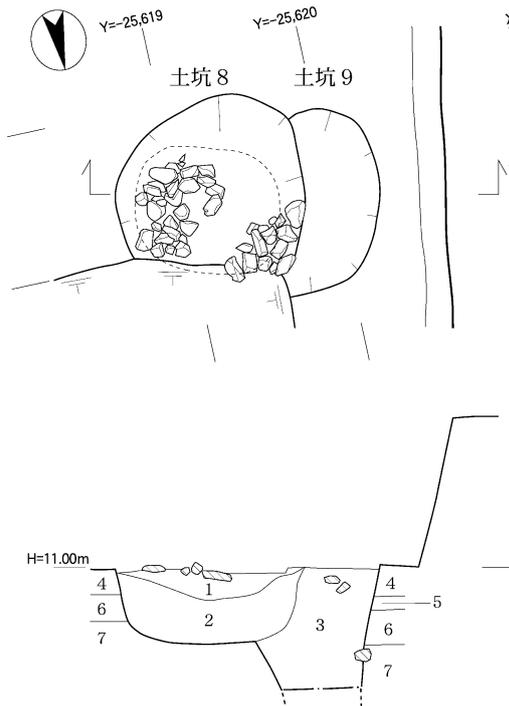


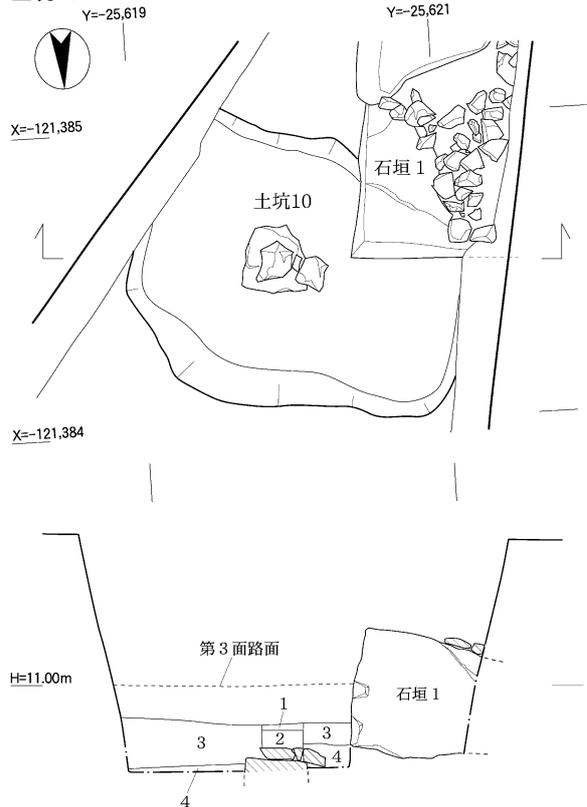
図15 石垣16実測図（1：50）

土坑8・9



- 1 10YR4/4褐色粗砂、微砂・シルト混（土坑8）
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、粗砂多量混、2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 粗砂混 ブロック混（土坑8）
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、粗砂多量混、礫φ10cm少量混、2.5Y5/3黄褐色シルト 粗砂多量混 ブロック混（土坑9）
- 4 10YR4/4褐色砂泥、粘質、2.5Y5/2暗灰黄色砂泥混
- 5 2.5Y4/3黄褐色細砂
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色粘土、炭・細砂混
- 7 10YR4/4褐色粘土、炭混、礫φ10～20cm少量混

土坑10



- 1 10YR3/3暗褐色泥砂、微砂多量混
- 2 2.5Y4/4オリーブ褐色泥砂、礫φ1～3cm多量混
- 3 10YR4/4褐色泥砂、粗砂多量混、2.5Y4/4オリーブ褐色泥砂 微砂多量混 ブロック混
- 4 10YR4/4褐色泥砂、礫φ1～3cm多量混、10YR4/3にぶい黄褐色泥砂ブロック混

図16 土坑8～10実測図（1：50）

構築方法は、まず、北に緩やかに傾斜する旧地形にあわせて、土手の整地を行い、炭・焼土を多く含む間層を挟んで、にぶい黄褐色シルト層（断割り東壁断面図 19 層）を積み上げる。そして、北側は、石垣 16 を積み上げるため、切り土を行い、石垣の構築とともに裏込め土を充てんしている。さらに、南側は、石垣 2 を積み上げ、礫を多く含む裏込め事業を行っている。絵図には東西建物が描かれているものがあるが、その痕跡は検出できなかった。

堀 6 石垣 16 の北側の外堀である。断割り東壁断面図 7・8 層の暗緑灰色泥土層やオリーブ灰色シルト層は堀の堆積土で、木製品が多量に含まれる 6 層は、堀を埋め立てた時のものとする。断割りで、堀の深度を標高 9.1 m まで確認したが、重機の掘削深度を超え、堀の底部は未確認である。

土坑 8～10（図 16、図版 5）土坑 8 は直径 1.2 m、深さ 0.5 m を測る。上面にはこぶし大の栗石が根石状にかたまっただけで検出され、掘形は土坑 9 を切る。土坑 9 の掘形は直径 1.2 m、深さ 1 m まで確認した。土坑 10 は土坑 8・9 の約 4 m 南で検出した。石垣 1 の北東角で石垣に食い込む。検出時の規模は東西 2.3 m 以上、南北 2.2 m を測る。埋土を掘り下げたところ、地表下約 1.3 m で直径約 0.3 m の柱痕を確認した。さらに北半を掘り進めると、柱痕の下に一辺 0.2～0.4 m の数個の石が残存していた。これらの観察所見から、当初は掘立柱構造の柱穴で、後に建て替えられて礎石が据えられたと考えている。西壁の断面観察で上下層に分かれているが、別の土坑が重なっていた可能性がある。第 1 面の成立に伴い礎石などは撤去され、土坑の上面に路面 17 が形成されている。洛外図にあるように、土坑 8・9 は、土坑 10 と対応した門の基礎部分と考えられる。土坑 10 は江戸時代前期には柱穴 9 に対応していたが、江戸時代後期には道路面がかさ上げされ、土坑 10 に対応して土坑 8 が今の位置に作られたと思われる。土坑 8・10 は明治期には撤去され、跡地は路面 17 となっている。ここで、土坑 8・9 は土坑 10 と比べて小規模なので、土坑 10 に対応する柱穴が、土坑 8・9 の北側の攪乱部分、石垣 2 に接する位置にあった可能性が考えられる。

### 3) 第 1 面の遺構（図 17、図版 1-1）

標高約 11.4 m で、路面 17（西壁断面図 19 層）を検出した。路面 17 は、当初江戸時代末期の遺構面と評価し、調査を進めたが、その後の調査の進展や、出土遺物の検討により、明治時代以降と判明したものである。また、この面で、石垣 1・2 の上面を確認した。第 2 面で検出する土坑 10、土坑 8・9 の部分も含めて、石垣 2 から南側は固く締まった路面となっていた。明治時代に淀城の廃城後、石垣石が払い下げになったとあり、当然、門が不要となり、門の礎石とともに撤去されたのであろう。土坑 10 は礎石撤去後に埋められ、路面 17 となったと考えられる。石垣 2 から北側は南北幅約 4 m の間が標高 11.6 m とやや高くなり、その北側は、傾斜して標高 10.6 m 以下に落ち込んでいる（落ち込み 4・5）。落ち込み 5 は、大正 13 年の一銭銅貨やガラス瓶を含む。近所の方の話では、戦後でも橋がなく、土手 7 部分とその北側の落ち込みは昭和期まで残存していたという。

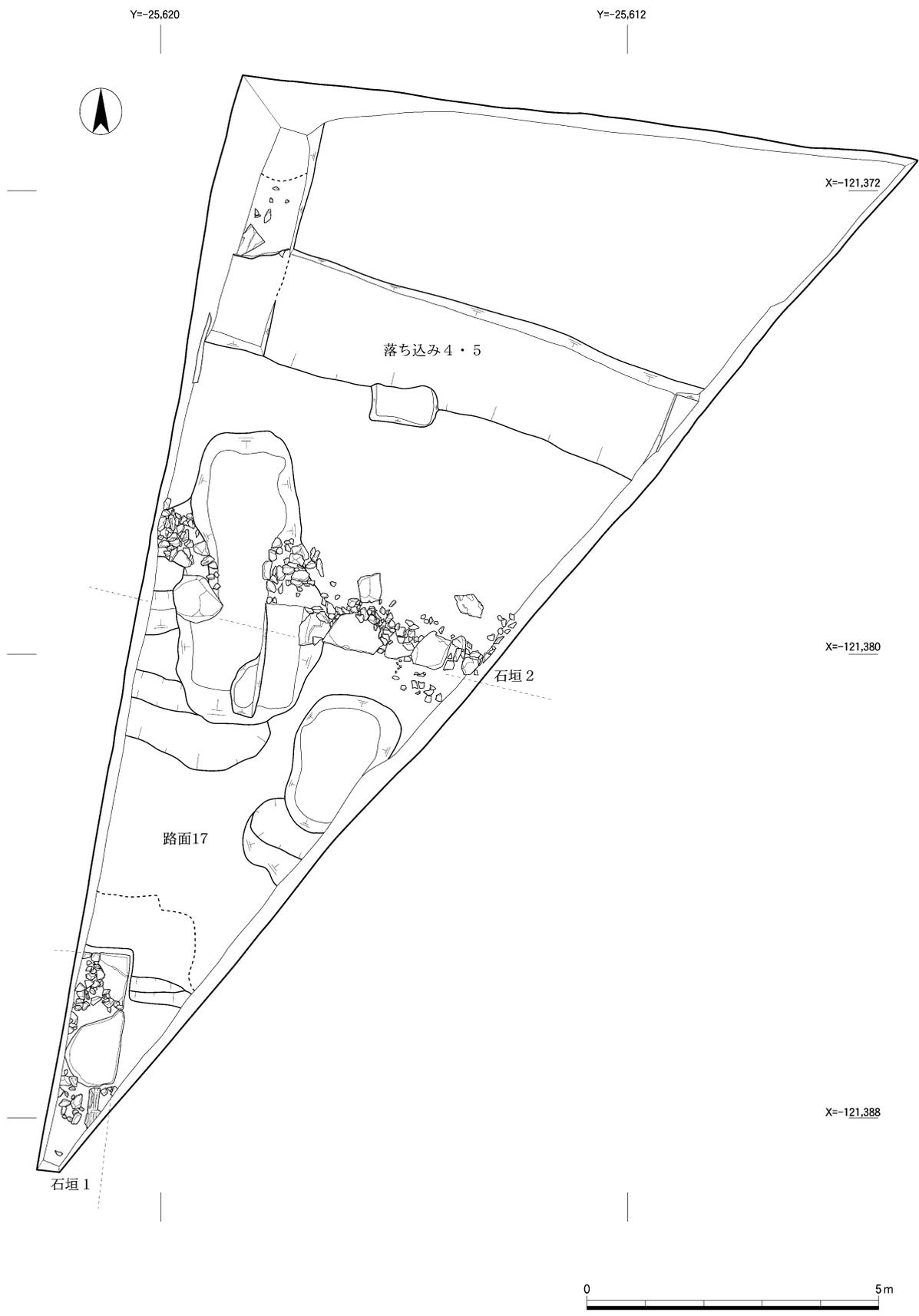


図17 第1面遺構平面図 (1 : 100)

### 3. 遺物

#### (1) 遺物の概要

出土遺物は整理箱に16箱出土した。内訳は土器・瓦類が14箱、金属製品1箱、木製品が1箱である。金属製品は、土手7などの埋土に混入して、木製品は堀6の埋土から出土した。

平安時代の遺物は、土師器皿・椀・甕、緑釉陶器椀、須恵器杯・甕、灰釉陶器片で、小片が多い。これらは各遺構や整地層から混入した状態で出土しており、とくに第3面の路面構築土と土手7構築土に多く包含されていた。

鎌倉時代から室町時代の遺物には、土師器皿、瓦器椀・鍋、施釉陶器皿・椀、焼締陶器鉢、瓦などが出土している。平安時代の遺物と同様に、整地層や第2・3面の路面構築土、土手7構築土、第4面整地層に混入して出土した。

桃山時代末期から江戸時代初頭の遺物には、土師器皿、瓦質の風炉や瓦灯、施釉陶器の瀬戸美濃皿、焼締陶器鉢、ミニチュアの刀、焼け壁土、瓦がある。土師器皿は土手7構築土や第3面の路面構築土から出土した。瀬戸美濃皿、ミニチュアの刀・キセル・銭貨は土手7構築土から、風炉や瓦灯、焼け壁土は土坑11から出土した。

江戸時代の遺物は少なく、江戸時代後期の第2面の路面構築土から丸瓦、平瓦、輪違い瓦、土坑10から巴文軒丸瓦、第1面から巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦が出土した。

#### (2) 土器・陶磁器類 (図18、図版6)

土器・陶磁器類は小片が多く、ここでは図示できた資料のみを報告する。

平安時代に遡る土器として、土師器皿(1)がある。口径10.5cm、器高1.3cmの皿Aで、口縁・

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、緑釉陶器、須恵器、灰釉陶器		土師器1点	1箱	0箱
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、施釉陶器、輸入磁器、瓦類		土師器7点、瓦器1点	1箱	0箱
桃山時代末期 ～江戸時代初頭	土師器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、瓦類、銭貨、金属製品、土製品		土師器1点、瓦質土器3点、施釉陶器1点、銭貨5点、金属製品1点、土製品1点	3箱	0箱
江戸時代以降	土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦類、銭貨、木製品		施釉陶器1点、軒丸瓦2点、軒平瓦1点、丸瓦1点、平瓦1点、輪違い瓦2点	9箱	2箱
合計		19箱	29点(3箱)	14箱	2箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

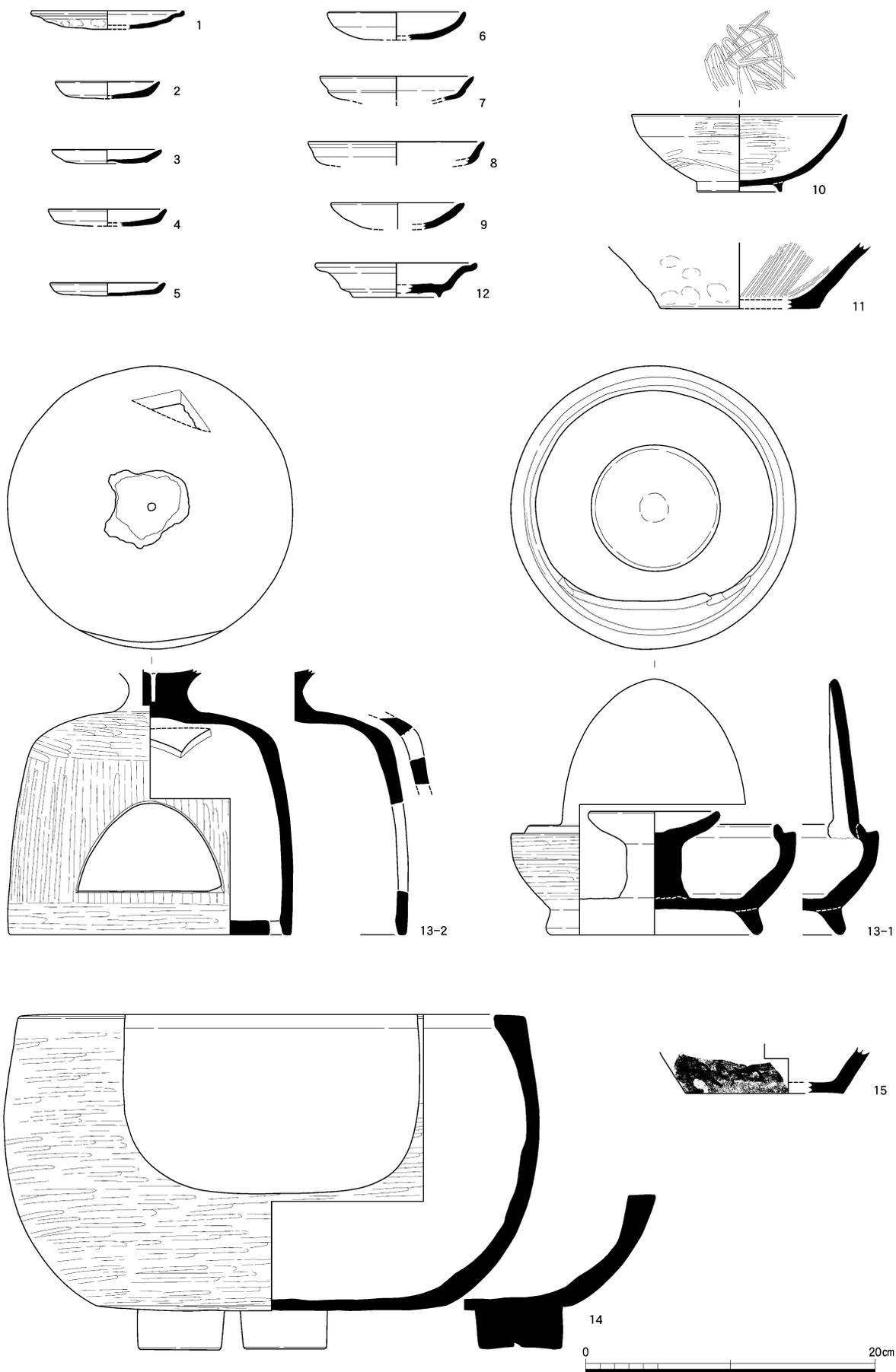


图 18 土器实测图 (1 : 4)

体部内外面はヨコナデ、底部外面はオサエのちナデを施す。淀城前期の路面3構築土から出土した。京都編年<sup>1)</sup>のIV期に属する11世紀代のものである。

中世の土器は、土師器皿と瓦器碗がある。土師器皿(2~8)は、口径7.1~9.2cmを測る小型の皿N(2~6)と、10.4~12.0cmの中型の皿N(7・8)に分けられる。いずれも口縁と体部内外面をヨコナデ、底部外面はオサエ、口縁端部はやや外反する。5~9は土手7構築土から、2~4は淀城後期の路面構築土から出土した。京都編年VII期の13世紀頃の土器と考える。瓦器碗(10)は口径14.8cm、器高5.4cm、底径5.7cmを測る。内湾する体部をもち、口縁部はやや外反し、三角形の高台を貼り付ける。内外面をヘラミガキし、内面底にはジグザグの暗文を施す。淀城前期の路面構築土から混入遺物として出土した。12世紀中頃である。

桃山時代末期から江戸時代初頭の土器には、土師器皿と瓦質播鉢、施釉陶器皿がある。土師器皿(9)は、口径9.1cm、残存高1.8cmを測る皿Sbである。底部から体部が丸く立ち上がり、外面はナデ仕上げしておらず、端部から内面だけをヨコナデして仕上げている。淀城後期の路面構築土から出土した。京都編年X期新の16世紀末の土器である。瓦質播鉢(11)は底径10.9cm、残存高4.7cmを測る。体部外面はナデ成形で、内面の播目は1単位10本である。内面は使用痕が激しく、播目は磨滅している。江戸時代初頭の路面層の整地層から出土した。16世紀頃かと考えられる。施釉陶器皿(12)は、口径10.8cm、器高2.4cm、底径5.9cmを測る瀬戸美濃の灰釉折縁皿である。内面底面以外は施釉される。内面底面は無釉で、回転ナデ跡が残り、底部には輪トチン跡がつく。土手7断割りから出土した。16世紀後半に属する。

また、淀城築城時の路面15の下層の土坑11から、江戸時代初頭の瓦灯と風炉が共伴して出土している。瓦灯(13)は瓦質土器で、身の部分と蓋の部分とに分割される。身の部分(13-1)は、外径19.8cm、口径17.0cm、底径14.3cm、器高17.8cmを測る。底部は油受けで、中心部に芯立てを置く支柱が付く。また、口縁部に舌状の衝立が付く。外面は丁寧な横ヘラミガキ、内面は横ナデされている。舌状の衝立はナデ成形後に口縁部に、支柱はロクロ成形後に内面中心に貼り付けている。焼成は良好。元は黒色で、二次焼成で変色している。蓋の部分(13-2)は、外径19.3cm、内径18.0cm、残存高18.5cm、厚さ0.7~1.0cmを測る。円筒形で、上部につまみ部分、上面中央に直径5mm、深さ約20mmの穴が穿かれている。欠損しているが、つまみの上部に皿が付き、灯火具を置くことができる。側面中央に、採光用の幅約10cmの爪形のスリット、そのスリットの反対側上部に一辺約4cmの三角形のスリットがある。側面は縦にヘラミガキ、上部と下部は丁寧な横ヘラミガキ、内面は横ナデされている。焼成は良好。元は黒色であったが、破損した後の二次焼成で変色している部分が多い。蓋のスリットと身の衝立をずらせて光量を調節できる。

風炉(14)も瓦質土器で、外径35.0cm、口径30.9cm、器高23.3cmを測る。底部に直径6.0cm、高さ2.7cmの脚が3箇所あり、本体に貼り付けられている。幅20cm、高さ12.5cmで半円形の口が切り込まれている。口縁部は内側に内反し、外面は丁寧な横ヘラミガキ、内面は横ナデ、焼成は良好である。元は黒色で、二次焼成で変色している。

江戸時代の土器には、土坑10の埋土から出土した施釉陶器鉢(15)がある。残存高約3.2cm、

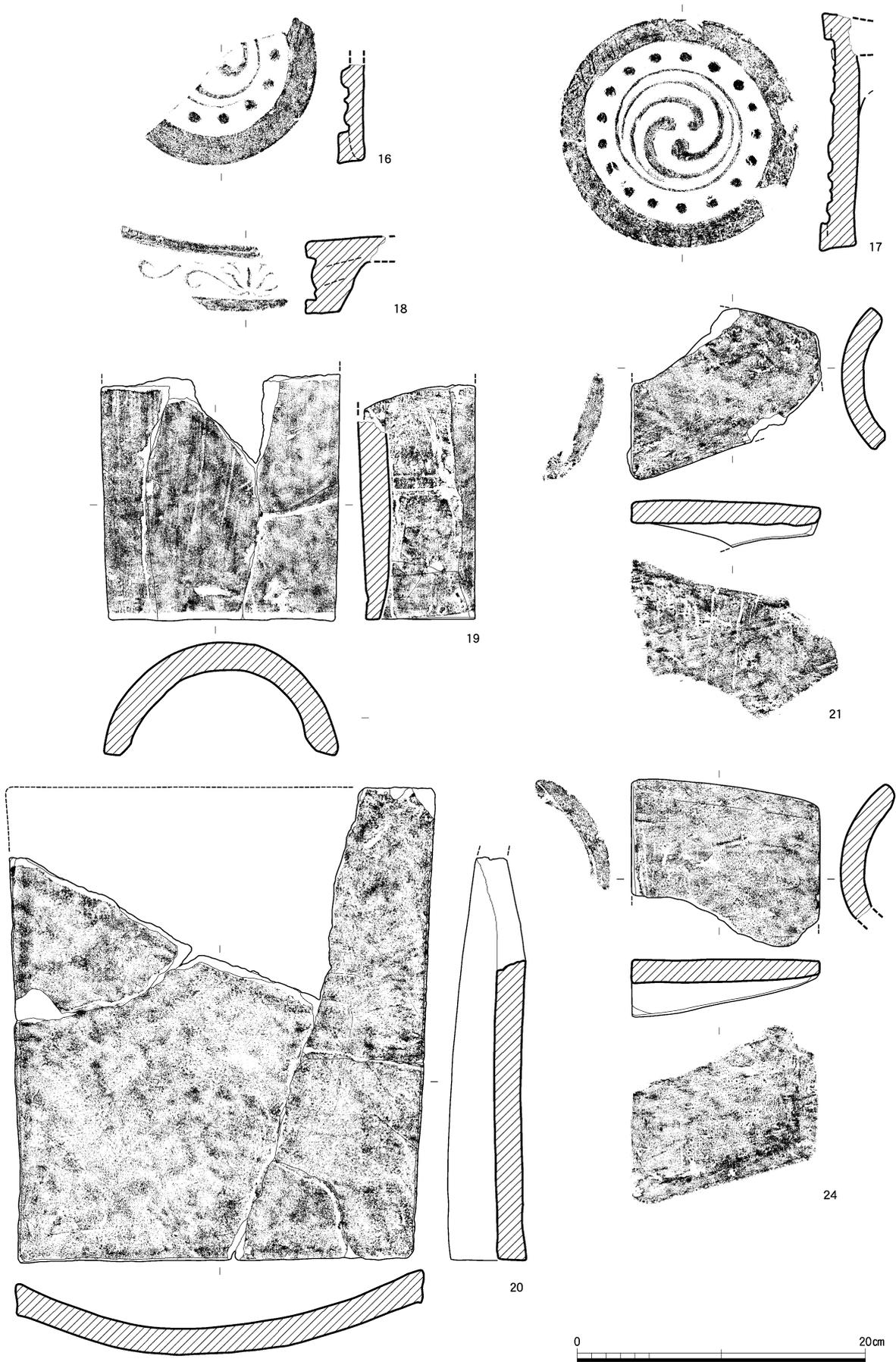


图 19 瓦拓影·实测图 (1 : 4)

底径 10.8 cmの瀬戸美濃の灰釉鉢である。内面は施釉されるが、外面下半と底面は無釉で、底部近くの外面に墨書が認められる。

### (3) その他の遺物

その他の遺物としては、瓦類、銭貨、金属製品、土製品などがある。

瓦類（図 19、図版 7）軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・輪違瓦などが出土した。

巴文軒丸瓦（16・17）はいずれも時計回りの三巴軒丸瓦で、外区に珠文が巡る。16の瓦当部分は、直径約 15 cm、13 個の珠文の内 5 個残存する。瓦当面に離れ砂が残る。瓦当部側面は横ナデ、裏面は横ケズリ後に縁ナデする。土坑 10 から出土した。17 は、直径 16.5 cm、17 個の珠文を配する。瓦当部側面は横ナデ、裏面は横ケズリ後に縁ナデする。第 1 面から出土した。

均整唐草文軒平瓦（18）は、中心飾りが三葉、唐草が 2 回転する。瓦当部凹面は縦ナデ、周縁・顎部凸面・裏面は横ナデする。土手 7 清掃中に出土した。

丸瓦（19）は残存長 17.3 cm、幅 16.6 cm、厚さ 2.0 cm を測る。凸面はナデ、凹面にコビキ B の跡がある。焼成は良好。

平瓦（20）は全長 32.7 cm、幅 28.3 cm、厚さ 1.9 cm を測る。焼成は良好。

輪違瓦（21・22）は、凸面はナデ、凹面にコビキ B の跡が残り、端部は面取りする。これらの瓦は、淀城前期の第 3 面路面を埋め立てた土層から出土しており、改修工事で不要の瓦を埋めたと思われる。江戸時代前期の瓦である。

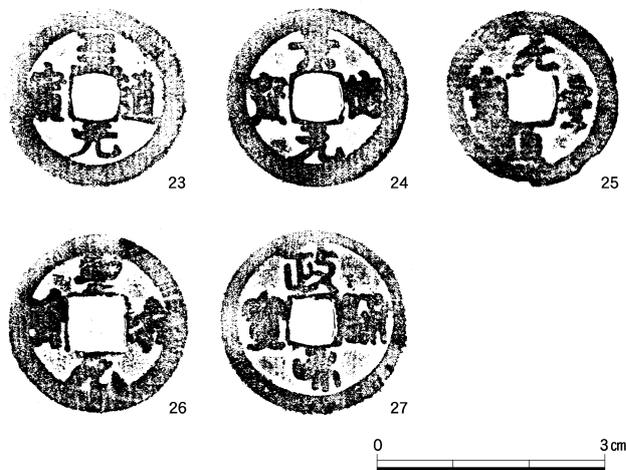


図 20 錢貨拓影（1：1）

表 4 錢貨一覧表

遺物番号	種類	出土遺構	外径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	初鑄年
23	至道元寶	あげ土	24.6	1.1	6.9	2.99	995
24	景德元寶	土手 7	24.3	1.1	6.3	3.01	1004
25	元豐通寶	土手 7	23.4	1.2	6.1	3.37	1078
26	聖宋元寶	土手 7	24.0	0.8	7.3	1.65	1101
27	政和通寶	土手 7	25.0	1.3	6.8	2.91	1111

銭貨（図 20、図版 7、表 4）銭貨は 5 点（23～27）出土した。北宋の年号のある銭貨である。26 の聖宋元寶は他の銭貨の約半分の重さで模鑄銭と考えられる。大半は淀城構築時の土手 7 から出土している。

金属製品（図 21、図版 7）金属製品としては、ミニチュア刀（28）が出土している。全長 11.0 cm、幅 0.5 cm、厚さ 0.4 cm を測るが、鏢の部分は欠損している。柄部分は刀身に一枚の薄い銅板を巻いて筒状にし、表面に丁寧に菱形模様を刻む。鞘は同様に作り、表面には赤漆を塗り固めている。刀身は幅 0.3 cm、厚さ 0.2 cm を測るが、腐食している。土手 7 の埋土から出土した。時期は江戸時代初頭であろう。

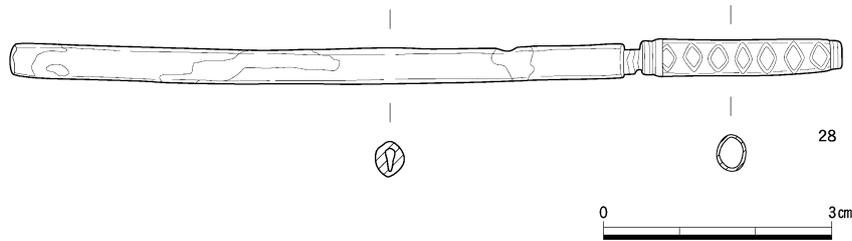


図 21 金属製品実測図 (1 : 1)

土製品 (図 22、図版 7) 壁土 (29) がある。残存長 11.8 cm、残存幅 10.9 cm、厚さ 4.7 cm を測る土壁の破片で、火を受けて赤変している。断面観察から、壁の中心部には直径約 1 cm の竹の跡が井げた状に残り、竹の周りは粗壁で塗り固め、両側の表面約 1 cm は仕上げの壁土が丁寧に塗られていることが判明した。淀城構築土の土坑 11 から出土した。江戸時代初頭。

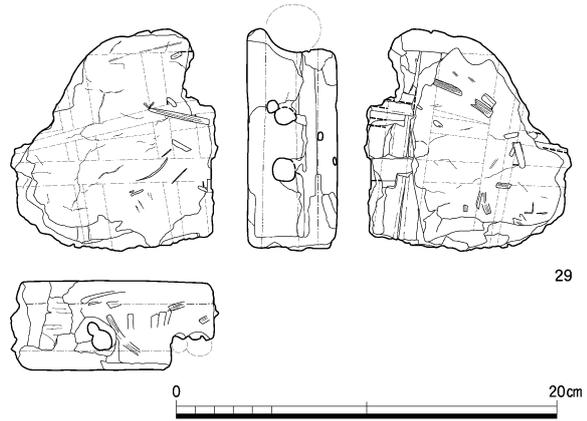


図 22 壁土実測図 (1 : 4)

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996 年

## 4. まとめ

今回の調査成果において最も重要な発見は、第3面と第2面で淀城の門・角櫓・石垣・堀などの遺構を検出したことである。これらの遺構は、「笹井家本 洛外図屏風」高槻市立しろあと歴史館蔵（図25）などに記載されている、京都から淀小橋を渡って淀城・東の曲輪への入り口である京口門と角櫓などと考えられる。江戸時代を通じて、門の礎石部分は作り直されていると考えら

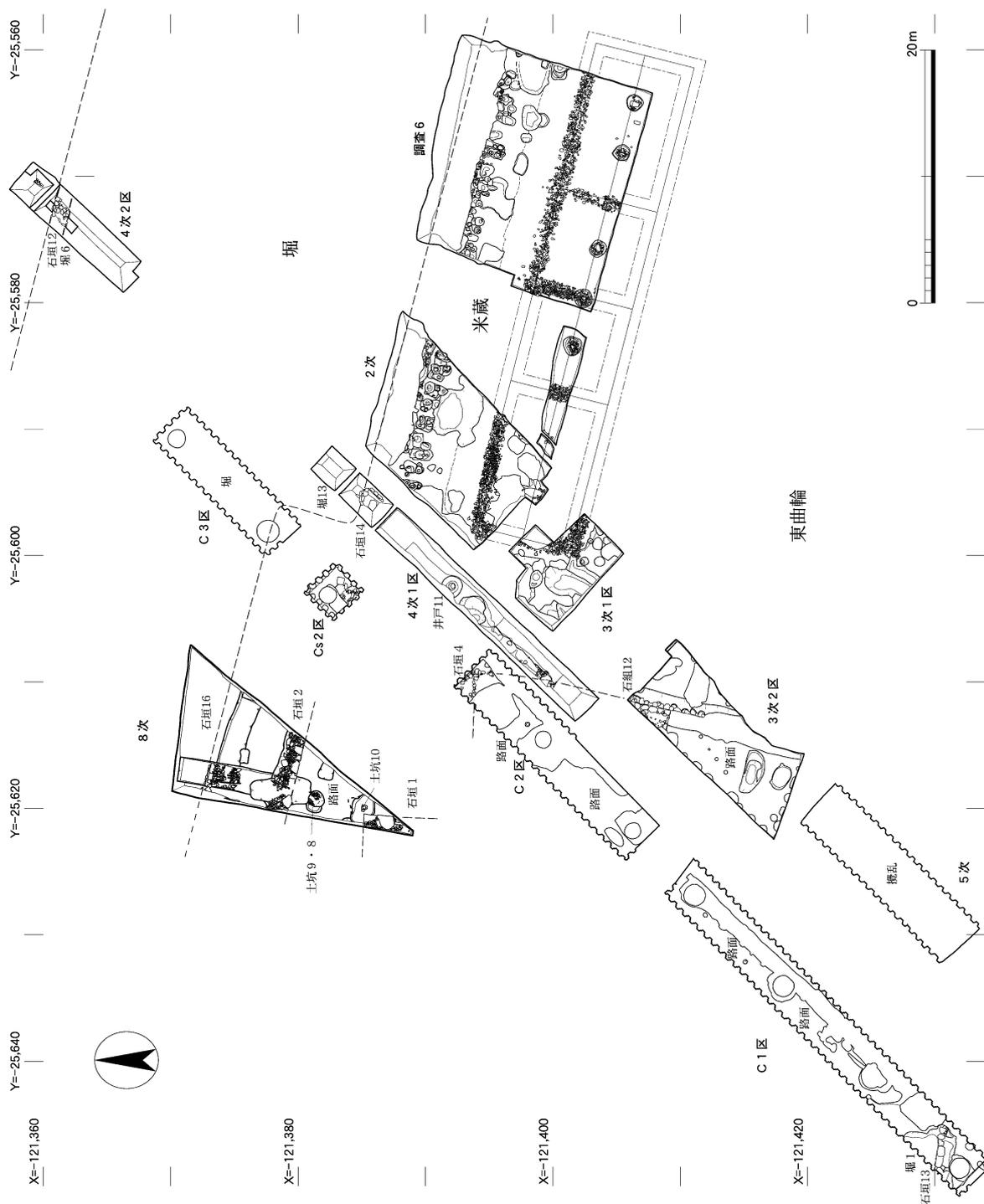


図23 淀城期周辺調査平面図（1：500）

れるが、石垣部分は築城期より廃城まで同位置で継承していた。

また、淀城築城時の構築土層には多量の焼土・焼け壁土などが混入していた。これは、今まで大坂街道沿いで実施した4・5・7次調査の盛土からも検出されている。淀城築城時には、周囲を焼き払って、焼土もこだわらず盛土とした可能性が考えられる。

下層の調査は淀城関係の遺構を保存するため南北トレンチで行い、淀城築城以前の南北道路の路面を5面検出し、道路沿いに建物礎石や南北方向の敷地境界石列を確認した。狭いトレンチで

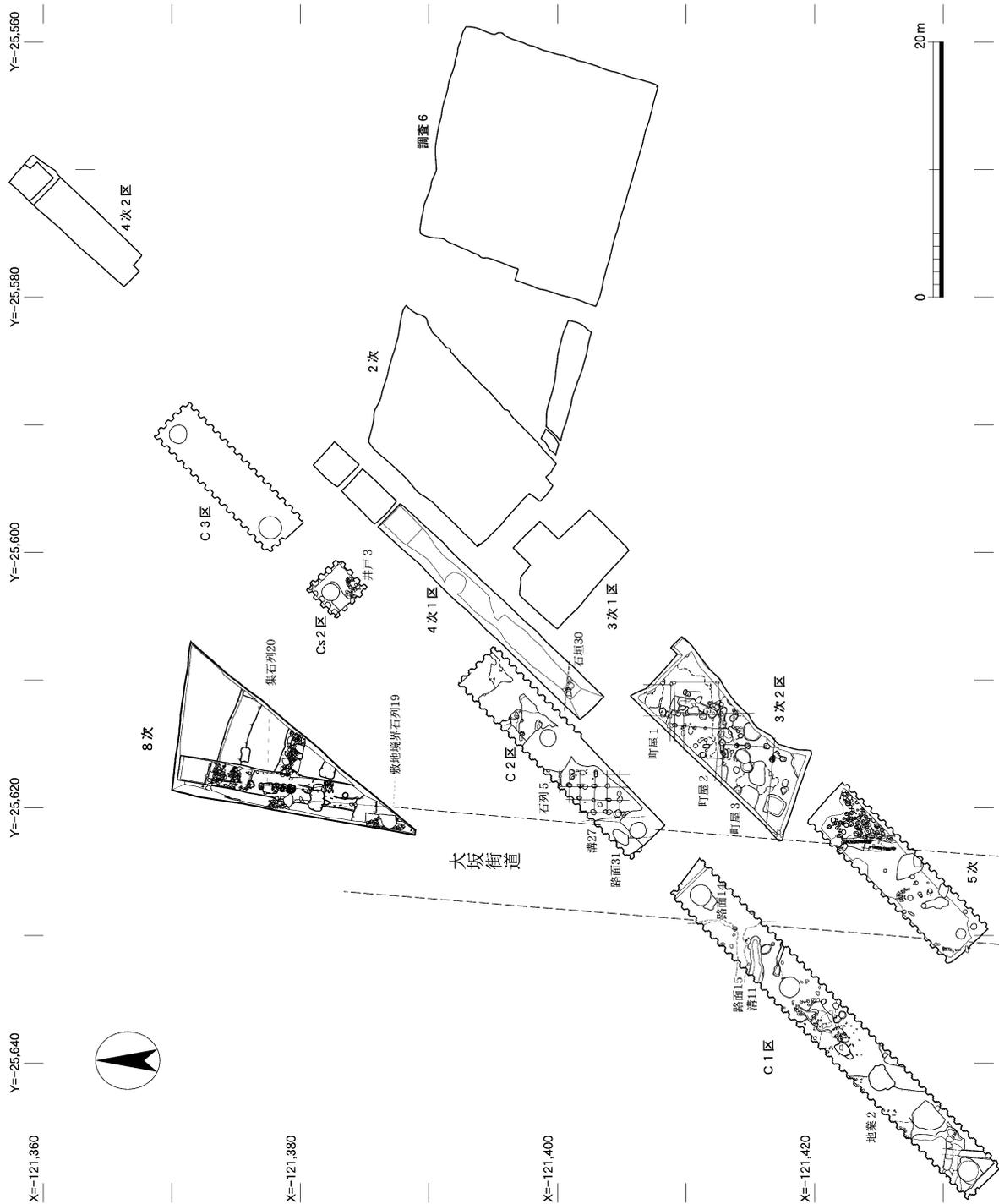


図 24 江戸時代初頭周辺調査平面図 (1 : 500)

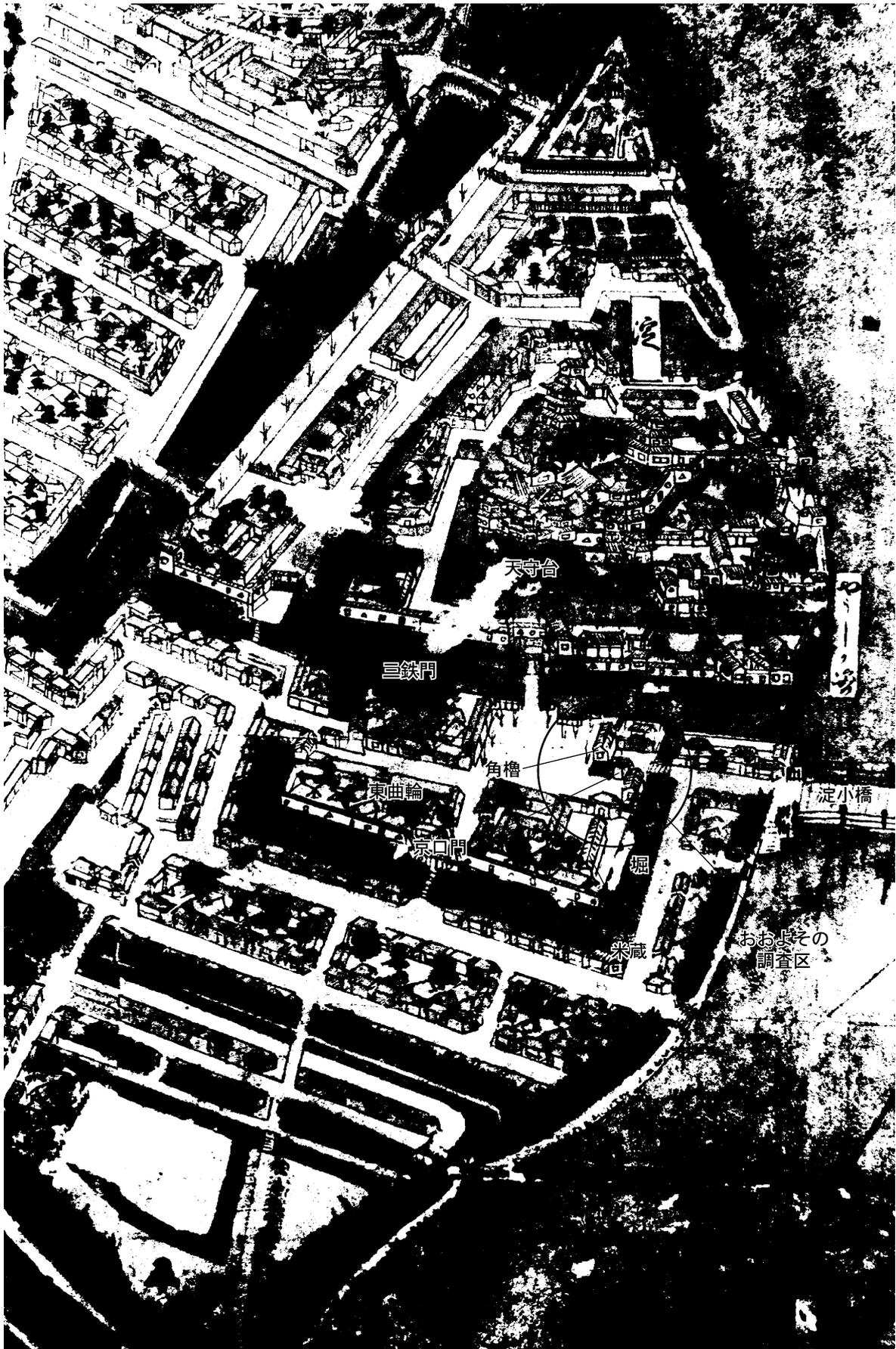


図 25 「洛外図」内の京口門と調査位置（右方向が北）  
 「笹井家本 洛外図屏風（淀城下部分）」（高槻市立しろあと歴史館蔵）に加筆・修正した。

あり明確に検出できなかったが、これらの遺構は桃山時代末期から江戸時代初頭の大坂街道と考えられ、街道沿いに町屋建物が立ち並んでいた状況の一端を知ることができた。

以上、周辺の調査成果もまとめて概観すると、淀城期では図 23、築城以前では図 24 のようになる。まず、淀城期では外堀は米蔵の北側に位置するが、C 3 区あたりで曲がり、8 次調査の堀 6 へと続き、京口門への橋部分へ続く。また、米蔵の布基礎は標高 12.5 m、3 次 2 区の石組 12 は標高 12 m 近くで検出されている。これに対し、京口門の路面は明治期でも標高 11.4 m で検出されている。このことから、米蔵の基礎は、周囲の路面よりも 1 m は高い標高 12 m 以上の場所で施工されており、C 2 区の石垣 4 や 3 次 2 区の石組 12 に囲まれていたことがわかる。京口門から入った武士は、左手に米蔵を仰ぎ見ながら路面を歩き、中堀に通じる C 1 区の堀 1 と石垣 13 を経て、本丸への入り口となる三鉄門に至ったのであろう。

次に、淀城下層の桃山時代末期から江戸時代初頭にかけての遺構をみると、幅約 7 m の大坂街道路路面を南北 50 m 以上確認し、道路の両側には瓦や石積の縁石・境界石、部分的には排水用の側溝を検出している。そして、道路の両側には町屋建物の礎石を数軒分検出した。また、固く締まった路面層は何度も補修・改修がされていたようで、地表下約 1 m の標高 11.0 m から 9.5 m までで 10 層以上確認している。これらのことから、桃山時代から江戸時代初頭にわたって大坂街道の両側には、町屋が並び、栄えていたことが想定できる。

なお、調査地は旧条坊復元案では長岡京左京九条三坊十三町にあたり、古代の遺構の存在が想定できる。しかし、今回の調査では桃山時代末期から江戸時代初頭の遺構確認にとどまり、対象となる遺構などは検出されなかった。しかし、混入遺物として、土手 7 などから鎌倉時代や平安時代後期の土師器皿や古墳時代と思われる遺物が出土していることから、下層および周辺には、より古い時代の遺構の存在が考えられる。

今後、周辺の調査を進めることによって、東曲輪だけでなく淀城の全体像や淀城築城以前の土地利用の実態が明らかとなるであろう。



# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうあと・よどじょうあと							
書名	長岡京跡・淀城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-17							
編著者名	尾藤德行							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2011年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 よどじょうあと 淀城跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 よどほんまちない 淀本町地内	26100	3  1191	34度 54分 20秒	135度 43分 11秒	2011年2月 22日～2011 年3月31日	115m <sup>2</sup>	淀駅周辺 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京跡  淀城跡	都城跡  平城跡	桃山時代～ 江戸時代初頭  江戸時代	土坑、柱穴、礎石、 路面、石列、縁石  土坑、柱穴、石垣、 堀、路面、土手	土師器、瓦質土器、施 釉陶器、焼締陶器、瓦 類、銭貨、金属製品、 土製品  土師器、施釉陶器、焼 締陶器、磁器、瓦類				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-17

## 長岡京跡・淀城跡

発行日 2011年5月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961